

第1部

青木誠四郎学長時代の大学・短大生へのアンケート調査結果

(大学は昭和28年卒~35年卒、短大は昭和26年卒~33年卒までの卒業生を対象)

I アンケートの趣旨

II アンケートの設問内容

III アンケート配布数と回答者についての集計

IV 全15の設問に対する回答の特性分析

設問1 「卒業年度、氏名、大学・短大の区別、所属学科」

設問2 「当時の状況から、入学でたいへんだったこと」

設問3 「本学を選んだ理由」

設問4 「入学のときの希望や夢」

設問5 「入学式の青木学長の訓示の内容」

設問6 「一番印象に残っている感銘を受けた水曜講演」

設問7 「水曜講演の青木先生の声、口調、表情、態度等」

設問8 「水曜講演以外の行事に関する思い出」

設問9 「先生の愛情溢れる学園づくりをどういう点で感じ取りましたか」

設問10 「先生の愛情の教えがどのように人生で生かされましたか」

設問11 「学生生活の思い出。楽しかったこと、嬉しかったこと、つらかったこと、悲しかったこと」

設問12 「他の先生の思い出」

設問13 「これからの大学・短大に期待すること」

設問14 「大学・短大の学生達に最も伝えたいこと、望むこと」

設問15 「先生にお会いできるとしたらお伝えしたいこと」

第1部要約

I アンケートの趣旨

アンケートの趣旨については、平成22年2月に同窓会（緑窓会）名簿に掲載の昭和28～35年の大学卒業生及び昭和26～33年の短大卒業生に送った下記のアンケート依頼文書を参照ください。

平成22年2月

東京家政大学・短大卒業生（昭和26年卒～35年卒）各位

立春も過ぎ、石神井川を飾る桜が待ち遠しい季節となりました。

本学園はこの地、陸軍第二造兵廠跡に移転して早や六十四年目を迎えようとしています。年々変貌を遂げていく本学園。もの言わぬ桜はどのような感慨を抱いているのでしょうか。

まず、自己紹介をさせていただきます。私は東京家政大学・短大で三十有余年、哲学の専任教員として教育・研究に従事してきました。最近、一般教育のカリキュラム改訂に伴い生活信条「愛情・聡明・勤勉」の由来や意味を調査する過程で素晴らしい方に出会いました。その方は、戦前、東京帝国大学で教鞭をとり発達・教育心理学者として活躍され、終戦直後、文部省に登用されて民主主義教育導入の使命を担うことになり、官僚の仲間と共に新教育制度確立のために獅子奮迅の働きをされましたが、一段落したところで、新制大学のスタートを切った本学に学長として迎えられ、7年後に急逝するまで、学園の基礎作りに尽力されました。

先生の夢は、「教授と学生が親しみあい、愛しい、和やかな日々の生活を送る」地上の楽園のような愛情溢れる学園づくりでした。日本の民主主義教育のモデル校をこの学園で実現したい、との気概に燃えていたと思います。その先生のお名前は青木誠四郎先生です。

皆さまは、あの名高い水曜講演を傾聴し、直接警咳に接して、先生の暖かいお人柄に接することができた幸運の学生です。戦後間もない時期で、施設・設備は不十分であったかもしれませんが、精神的には本学園の黄金時代であったと個人的に高く評価しております。

ぜひ皆さまから先生の活躍や当時の学園の様子をお聞きし、本学の今後の発展に役立てたいと思いますので、同封のアンケートにお答えいただければ幸甚です。

期限は本年3月31日。どうぞよろしくお願い申し上げます。

なおアンケートのご参考になるかと考え先生の水曜講演の題目と概要を同封いたしました。

ご協力のほど、重ねて切にお願いする次第です。

東京家政大学
教授 関根靖光

青木誠四郎先生の水曜講演

(著書『若い女性 (ひと)』を参照)

昭和・年・月・日	水曜講演・題目	概 要
25・5・13	学制発布八十年記念	日本の教育の歩みについて、そこに近代的な教育の歩みをもっと徹底することが考えられなくてはならない
26・3月	生活設計	過ぐる年の生活に対する十分な反省と吟味こそ大切である
26・6・5	時間の使い方	時間を使うには、どう使うかの設計がなければならない
26・9月	自己の確立	自己自身のことは、結局は自己自身が背負わなくてはならない
26・11・28	勉学への精進	学問についても、技術についても、それを学んでその生活が自信のもてるものにしなければならない
26・12・20	逝く歳を送る	ここに我々は一年を過ごしたその間の経験を我々の人生をもっと高いものにするために役立てなくてはならない
27・1・11	生活と理想	一日一時の生活について、それがあなたがたの全体の生活を作っているものであることを忘れないでほしい
27・1・23	生活を創る	あなた方が自分を立派にしようとするならば、何よりもあなた方自身が自分の生活を大切にし、一つの生活をもゆるがせにしないという考えがなくてはならない
27・2・6	人に迷惑をかけない	他を愛する生活、それがともすれば利己の心によって火を消すおそれがある。いつの時もその灯を高くかかげることを忘れないで欲しい
27・4・3	独立日本の歩み	我々は苦難に耐え勤勉な生活を営む覚悟がなくては、この独立が真の独立でなくなることを知らなければならない
27・4・16	美しさへの第一歩	清潔な感じ、殊に若い婦人における清潔さ、これは何ものにも勝る美しさである
27・4月?	真の美しさ	人間の美しさは端正な簡素な美にすべて現れているように、その人の心の美しさから発するものである
27・5・9	母の日について	(母の日の意義を説く。一つは、子としての母への感謝の日。他は婦人全体への社会からの感謝の日)

27・5・14	大学の学生	どこまでも批判的でそれに疑問をもち、考え、教師の研究よりも高いところに届こうとするのでなくてはならない
27・5・26	人を愛する	人は仕合せになろうとしている。人は親しんで仲良く暮らそうとしている
27・6・18	友情について	高められた愛というものが最もよく示されているのは友達の間、友情である
27・9・11	新しい努力	他を愛していく具体的な仕方を学ぶこと
27・10・22	困難に対する心	忍耐と努力と、いつも明るい希望をもって一歩前へ出る。それ以外には道はない
27・11・5	消費生活	消費を合理的にするにはどうすればよいかを自ら修練することが必要である
28・1・11	善意の解釈	お互いが他人のことを素直な心、誠実・善意をもって見あうことが、住みよい生活を作る道である
28・1・21	勉学の目的	学校は、何かを学ぶというのではなく、いかに考えるかを学ぶところである
28年?	感情と理性と聡明	我々はもっとよく考える人間でありたい。そしてその意味で聡明になりたい
28・2・11	人間性の尊重	お互いが他の人の心になって、その人の心をいたわる気持ちをもっていきたい
28・4・11	女子学生としての心がけ	社会に出て働くにしろ、家庭の生活をしていくにしても、婦人が生活の権利をもちうるのは、婦人自身の實力である
28・4月?	新入生のためのオリエンテーション	生活を清潔に美しくし、カレッジライフをお互いの共同で享受せよ
28・4月?	愛情の問題	人の世のきびしい生活、しかも孤独な生活。それを支え合うものは愛情以外にはない
28・4月?	友情と恋愛	恋愛にも成長がある。それは友情が成長すると同じように
28年?	行動力・労働・勤勉	働くことは人間のもつ大きな宝である
28・5・20	人間は他を仕合せにする事ができる	他の人を仕合せにすることは、わたし達の人を愛する心が手近なところに働くことで足りる
28・6・10	公共性と公共物	ここにいる一人の人を愛するためでなく、知らない人知っている人を含め社会全体の人を愛する為に公共物があると考えべき

28・6・23	感情	自分の感情が鋸屑のように燃えないで、松明のようにふかぶかと燃え続ける奥行きのある感情の持ち主になりたい
28・7・8	研究と勉強	ひとつの研究テーマを持って、そしてそれについて常に注意し本を読み考えよ
28・7・10	夏季休業の過ごし方	帰ったら翌日にも学校へ行って、かつての担任の先生や校長先生に挨拶せよ
28・9・30	試験について	試験は、学生にとってその勉強に一つの発展をもたらす機会である
28・11・4	協力	互いに人の立場を考え、いたわりあい親切にしあう態度がなくては民主的社会はできていかない
29・1・22	毎日の努力を怠らぬこと	自己の生活にかかる期待は、国民全体の生活をよくしていく道につながるものでありたい
29・1月?	生活に対する態度	一步一步を確実につまない人の生活は全体としてよくなる
29・2・3	消費ブームの生活	金銭に束縛されないで自分の意志で行動すること
29・2・24	知性の解放	感情の満足にはいつも理性の光が添っていない
29・4月	愛情と勤勉と聡明	よく考えられた生活をしなければならない
29・4月	始業に臨んで心構	自らの生活の意義を見出して勤勉であれ
29・4月	生活の進歩	我々は惰性に支配され惰性のしもべとなっている生活から立ちあがっていくことを考えなくてはならない
29・6・16	規則	規則は社会生活を調和していく線である、従ってこれを厳然として守り、行うことを当然として実行する態度がなくてはならない
29・6・30	学生の進むべき道	勉強するに、享楽の誘惑に耐え質素な生活をしなくてはならない
29・7・10	家郷を省みる	常平生心配かけたご両親に孝養をつくせ
29・9・22	学問の勉強	語学・数学の問題は、学問の道を進もうとするもの、技術をもっと世界的に考えていこうとする人が、心していかなければならないことである
29・10・13	労苦の価値	何事でも労苦なくして自分を豊かにし自分を高めることはできない

29・10・27	素直な心	日本人の、なにか自由のない何でも遠慮するというようなひっこみ思案な陰鬱な気持ちは、誤解をうけるといふばかりでなく世の中を暗くする
29・11・10	服装について	いつの世にあっても若き女性は美しかるべきものである。知的な洗練された美しさをもつべき
29・12・10	実力と修練	何かひとつ自信のある道を得ようとするならば、苦勞に耐えて修練しなくてはならない
29・12・18	正月の行事	少年時代を通じてひとつの楽しい時として思い出される
30・1・19	成人への道	欲望への節度、働きの集中ということによって人々は成人になることができる
30・1月?	勞苦に耐える	らかなことを求める生活は、学校生活という将来の生活を無にすることになる
30・2月?	一年間の学業を終わって	学生時代を十分な自力で進みぬく
30・4月	学生の特権と義務	学生は勉強を義務としている
30・5・4	義理	義理というのは、人と人との間柄での道徳的な論理といふべき
30・6・1	行動と自己表現	我々は自分の知性をみがきそこから行動について考え、また行動をコントロールすることによって、自分の精神を正しくしていくように心がけなければならない
30・6・15	生活を愛する	人間の生活にはどういふところであっても、そこで果たされそれによって自分の生きているかを見出すことができる
30・6・29	生活と習慣	毎日の生活に注意してよくしていくという陳腐なことが実に大切なことである
30・7・9	夏の生活	家政学専攻の学生は、その専門の勉強からいって家庭全体のマネージメントをすることをすすめたい
30・9・12	人間のめぐり会い	人間のめぐり会いとは、悩める魂のめぐり会いなのである
30・9・21	試験観の転換	もう一度理解をたしかめる機会として試験を積極的に利用する
30・10・14	鍛錬	自分の人生は自分が作っていかなければ誰も作ってくれるものではない
30・11・2	知的な強さ	脆弱な生活態度は、現在並びに将来のために必ずや不幸をまきおこすものとなる

30・11・2	愛情	真の愛情は、その人の心をいたわり、その人を高めていこうとする心に見られる
30・11・16	誠実	人には見破られないかもしれない。しかし神様はそれを見ておられる。神を信じない人でも自分の良心は最もよくそれを見ている
30・12・7	(無題)	日本人を幸福にするには日本の婦人が幸福にならなければならない
30・12月?	問題を持つこと	問題のないところに進歩がない
31・1月	成年を迎える	成人するということは、理解が高まるということである
31・1月2月?	自分でわかること	まず自分にわからせよ、でなければ他にわからせることはできない
31・4月?	実力をつけること	学科の単位をとることはクレジットをとるということで、学生の実力を証明するものである
31・4月?	人間の進歩	他のひとから注意され、それではじめて自分を反省出来るといったことはその人にとって新しくなり進歩することである
31・4月?	求めて幸福なこと	幸福ということは、外面的なことの如何にかかわらず、どんな人でも幸福たり得るものである
31・5・9	生活に献身	人間の今のこの時、それが生活を創っていく。それが空虚であることは生活に空洞を創ることであり、それが一生つきまとうものである
31・5月?	礼儀と愛	知らない人でも知っている人でも、時には憎らしいと思う人にもにこやかに挨拶せよ。礼儀を守れ。そこにお互いの尊敬と愛の心が必ず起こる
31・10・15	人々の恩愛	人間の愛情こそ人間を救うものである(注: 皆の愛情によって大病から回復できたことを先生は感謝している)
31・10・24	物事を考えること	よく考えて万事に処すること、そこに聡明さがある
31・11・14	学生祭についての反省	学生祭は、周到な計画をたて、しっかりした段取りをし、それを順序良く片つけていく良い訓練

それから一カ月もたたぬ12月9日朝、先生は書齋で急逝される。学生に贈るクリスマスカードを一枚一枚描いていたさ中の発作であったと伝えられている。

文字通り、学生のために、いのちをかけて「愛情」を実践された人生であった。

- 8 水曜講演以外に、学生祭などの行事や自治寮などの活動、相談や楽しいおしゃべり、そして母の日のカーネーションのカードやクリスマスカードなど、青木先生との懐かしい思い出がたくさんあると思います。いくつか話していただけますか。

① 自由記述：(

② 自由記述：(

③ 自由記述：(

- 9 大学・短大での学生生活は、いま思い出しても素晴らしい体験だったと思います。青木先生は、「ひとを愛せよ。ひとを愛することの喜びを知れ。愛せられる喜びを忘れるな。愛せられることを求めることよりもまずひとを愛せよ。本学園のあらゆるところに、この心が染みわたることを教職員学生ともども念じている。この事は一度この学園にふみ入れる人々の感じられることでもある」と述べておられます。生活信条「愛情・勤勉・聡明」はこのような学園の導きの星として定められました。本学園が、愛情溢れるこの世の楽園を目指していることを学園生活のなかで、どういう点に感じ取っておられましたか。具体的に思い出されることがあれば書いてください。

自由記述：(

- 10 青木先生は、戦後の日本の民主社会の基礎は「愛情」にあると考えていました。卒業後にもこの教えを生かしてほしいとの希望をもっていただきたいと思います。いままでの人生に先生の教えが何らかの仕方で生かされたと思うことがあればお書きください。

自由記述；(

- 11 学生生活全般についてお聞きします。一番楽しかった事、一番嬉しかった事、一番つらかった事、一番悲しかった事。覚えている限り、全部でも一部でもよろしいので書いてください。

- 12 いろいろな先生の授業を受けたと思います。懐かしく思い出すことがあれば、どんな先生のどんなエピソードでもよいです、書いてください。自由記述：(

- 13 これからの東京家政大学・短大に最も期待したい事は何ですか。

自由記述：(

- 14 東京家政大学・短大の学生たちに最も伝えたいこと、最も望むことを記してください。

自由記述：(

- 15 最後に、青木先生にお会い出来るとしたら、先生に何をお伝えしたいですか。

自由記述：(

Ⅲ アンケート配布数と回答者についての集計

下記の「アンケート対象の各卒業年度の卒業生数と回答者数に関する集計」表を参照ください。なお卒業生数は住所判明者数です。大学の対象者は285名で回答者数は76名。26.7%。短大の対象者は1159名で、回答者数は233名。20.1%。大学・短大合わせて、309名の方から回答がありました。第2部の「アンケート回答集」には、掲載許可の回答すべてが掲載されています。

アンケート対象の各卒業年度の卒業生数と回答者数に関する集計

卒業年	大学卒	大学回答者	短大卒	短大回答者
1951 (S.26)			15	1
1952 (27)			21	7
1953 (28)	18	6	112	33
1954 (29)	7	3	178	33
1955 (30)	40	9	197	35
1956 (31)	36	11	224	45
1957 (32)	41	17	208	44
1958 (33)	41	10	204	35
1959 (34)	45	8		
1960 (35)	57	12		
総合計	285	76 (26.7%)	1,159	233 (20.1%)

このアンケートをきっかけに、回答者の脳裏に懐かしい日々の一コマ一コマが想起されました。以下、感想のいくつかを紹介します。

A 大学

- 1 昭和31年卒、O.Kさん「今回このアンケートを書くことになり、当時の友人から電話をもらいました。青木先生の思い出話をしましたが、青木先生は誰にも思い出を残してくださったことが分りました。」

B 短大

- 1 昭和26年卒、T.Sさん「今回のアンケートで本当に六十数年振りに学生時代を回想させて頂きまして有難うございました。私にとって青木学長先生は自分の父親の様に思っておりますが、皆さんにそのことを話しますと皆さんもその様に感じておられる様で、学長先生は本当に皆さんに親われ尊敬された先生でした。」
- 2 昭和30年卒、T.Mさん「卒業して50数年。今改めて青木学長先生の偉大さに触れ、私達はなんて幸せな時を過ごすことが出来たのだろうと感謝の気持で一杯です。」

IV 全 15 の設問に対する回答の特性分析

設問1 「卒業年度、氏名、大学・短大の区別、所属学科」

回答者の卒業年度及び大学・短大別に関する集計については、前頁の集計表を参照ください。また各回答者の氏名、所属学科は、第2部の「アンケート回答集」で確認してください。なお、個人情報保護のため氏名はすべてイニシャルで表現されています。例として「関根靖子」の場合「S.Yさん」となっています。

設問2 「当時の状況から、入学でたいへんだったこと」

次頁の集計表を参照ください。

大学・短大の卒業生とも最も多かった回答は、入学に際しての親の経済的負担（大学卒は19名、短大卒は32名）及び、地方出身者の上京・帰郷の長時間を要する交通の不便さ、及び自宅通学生の長距離・満員通学などです（大学卒は19名、短大卒は58名）。親の負担に言及する場合、生活することもたいへんな時期に学費や生活費を出してくれた親への感謝の言葉も書き添えられていました。

次に目立つのは、複数の点で寮の生活のたいへんさです。関連する項目を合計すると大学では12名、短大では43名の回答。戦後の食糧難は寮も例外ではなく、食事の質や量の乏しさへの不満が指摘されています。その他、初めての共同生活への不慣れ、同室者の多さ、プライバシーのなさ、それに消灯後、宿題や試験のために懐中電灯や外灯の明かりの下でやらねばならなかったこと、更に暖房には部屋に一つの火鉢しかなく寒かったことなど。物資不足の時代に共通の困難さでした。

しかし、当時を振り返って、いま思えば寮生活は楽しかった、有益だった、懐かしい等の好評価の言葉が回答のあちこちに散りばめられていることは銘記すべきことだと思います。

授業に関連する項目で、校舎について設備の不備を指摘している回答もありますが、当時はどの大学も急ごしらえの施設・設備のため同様の問題を抱えていました。以下、大学・短大の回答例です。

A 大学

- 1 昭和30年卒、F.Eさん「親の経済的負担。親は戦争を経験してお金や物はなくなるけれど身についたものはなくならないと思って無理して勉強させてくれたようで、父は男女の差別はしませんでした」

B 短大

- 1 昭和28年卒、A.Yさん「千葉県の成田に近い農村からの通学でしたので、駅まで出るのに4キロ程歩き汽車で2時間、約3時間余りの通学で苦労いたしました」
- 2 昭和32年卒、F.Sさん「田舎から上京したので、何もかも驚きで雰囲気にも馴れる事。寮生活の規律になれる事。短大の実習（洋裁、和裁、手芸）がたいへんでした」

設問2：入学時たいへんだったこと 集計表（大学）

大 学 卒 業 年 度	28 年	29 年	30 年	31 年	32 年	33 年	34 年	35 年	総 計
1 親からの上京・入学許可、感謝	1			1				1	3
2 親や兄弟からの経済的負担、感謝	1	2	1	4	5	3	1	2	19
3 上京-帰郷時及び通学における交通の不便	1		4	3	4	3	1	3	19
4 不安、心細さ、ホームシック、カルチャーショック、とまどい							2		2
5 下宿探し、下宿生活等				1		1	1	1	4
6 授業：資格等の単位の多さ、宿題・実習の多さ、時間のなさ		1							1
7 授業：厳しい指導（お直し、期日厳守等）							1		1
8 授業：その他（学力不足、校舎や設備の不備、教材入手困難など）	2	1	1				1		5
9 寮生活：同部屋の人数の多さ、プライバシーのなさ等			1		1				2
10 寮生活：方言、共同生活の難しさ、規律への慣れ			1	1				1	3
12 寮生活：食事の質と量の少なさ			1			3		1	5
13 寮生活：その他（火鉢だけの暖房、懐中電灯での勉強など）			1					1	2
14 寮生活：楽しかった、充実していた、有益だった、懐かしい			1	1	1	2	2		7
15 学園生活は全般的にたいへんと思わなかった（感謝、楽しかった）			2	2	1		1	1	7
16 上記以外の内容（衣食住すべてがたいへんだった等）	1					1	1	1	4
17 回答なし	1				4		1	1	7

設問2：入学時たいへんだったこと 集計表（短大）

短大卒業年度	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	総計
1 親からの上京・入学許可、感謝	1	1	2	5	3	4	2	5	23
2 親や兄弟からの経済的負担、感謝		1	3	8	2	7	8	3	32
3 上京-帰郷時及び通学における交通の不便	1	1	13	4	9	10	11	9	58
4 不安、心細さ、ホームシック、カルチャーショック、とまどい			3	2	3	3	2	5	18
5 下宿探し、下宿生活等		1	1	1	1	1	3	1	9
6 授業：資格等の単位の多さ、宿題・実習の多さ、時間のなさ						1	2	3	6
7 授業：厳しい指導（お直し、期日厳守等）							1	1	2
8 授業：その他（校舎や設備等も含む）		1	2	2	2	1	1		9
9 寮生活：同部屋の人数の多さ、プライバシーのなさ等			2	1	1	1	2	3	10
10 寮生活：方言、共同生活の難しさ、規律への慣れ			1	3	2	2	2	2	12
12 寮生活：食事の質と量の少なさ			4	2	2	2		1	11
13 寮生活：その他（火鉢だけの暖房、懐中電灯での勉強など）	1	1	1	2		1	2	2	10
14 寮生活：楽しかった、充実していた、有益だった、懐かしい			1	1	1	1	2	6	12
15 学園生活は全般的にたいへんと思わなかった（感謝、楽しかった）		1	6	3	4	5	8	5	32
16 上記以外の内容（衣食住すべてがたいへんだった等）			1	1	2	2			6
17 回答なし			2	3	3	4	5	4	21

設問3 「本学を選んだ理由」

大学卒で最も顕著な回答は青木先生への尊敬と憧れでした。10名。短大卒では33名。入学前の先生の業績や活動を直接知っていた学生は少なく、先生が戦前から児童心理学、青年心理学の第一人者で、戦後は文部官僚として民主主義教育導入に活動して来たことは、親・親類・知人、高校の教師から聞かされ入学を勧められたと推測できます。

次に、卒業生からの入学の勧誘。祖母、母親、姉妹、親戚及び知人の卒業生からの推薦は、大卒は合計23名、短大卒は35名。卒業生である高校教師からの推薦は、大学は9名、短大43名。確かに校風や教育環境を知るには、体験者から情報を得るのがより正確でしょう。

卒業生ではない高校教師からの推薦が大学8名、短大30名に及びますが、著書や講演等で新しい教育の啓発に活躍していた先生については、卒業生でなくても高校教師は十分知っていたと思われます。

以上は、大学・短大や教員の評判や評価に関連しますが、本学を選ぶ際に、本人自身が教職や栄養士等の資格取得や知識・技術の修得をしたいから、という理由は本学の特色からいって当然です。大学は10名、短大は36名。

良妻賢母校、いわゆる花嫁学校としての伝統を基準にした人は大学4名に対して短大26名。これは、父母や親類から勧められたと回答した大卒が8名に対して短大卒の場合は多く、41名であることと相関していると考えられます。しかし、入学後は熾烈な勉学・修学によって、みな自立した職業人として育っていきました。以下、大学・短大の回答例です。

A 大学

- 1 昭和28年卒、U.Kさん「師範学校時代に青木先生の児童心理・青年心理の本を学ばせていただき、先生から直接教をいただきたいと思ひまして選ばせてもらいました」
- 2 昭和30年卒、N.Yさん「高校の先生が渡辺学園の卒業生で、学長が素晴らしい方だから、ということで勧めて下さいましたので」

B 短大

- 1 昭和26年卒、T.Sさん「旧制女学校当時、書店主催の教育講演会に青木先生が来校なされ、生徒会長として接待係をし、恩師と共に会話し魅かれたのがきっかけと思います」
- 2 昭和28年卒、H.Yさん「終戦ということで未来が読めず、これからの女性はどうなるのか不安でしたが、家族の勧めで腕に力をつけなければと思い、家政方面を勉強しようと思ひました」

設問3：本学を選んだ理由 集計表（大学）

大 学 卒 業 年 度	28 年	29 年	30 年	31 年	32 年	33 年	34 年	35 年	総 計
1 女性の自立・向上に積極的に取り組む 大学、仕事をもって働きたい	1					1		2	4
2 栄養士・保育士・幼稚園教諭・家庭科 教師資格、被服の知識・技能修得		2			2	1	2	3	10
3 良妻賢母校として伝統があり評価が高 い、良き家庭人になる	2						1	1	4
4 父母ほか家族、親類からの勧め				2	1	1		4	8
5 児童心理学、青年心理学の第一人者で ある青木先生への尊敬、憧れ		1	1	2		3	2	1	10
6 児童心理学で名声の高い山下先生がお られるので							1		1
7 東京女子専門学校・東京家政大学卒の 高校教師からの勧め			3	2	3	1			9
8 特に卒業生である言及のない高校教師 からの勧め		1	3		1	1	1	1	8
9 母が卒業生なので	1			2	1	2		1	7
10 祖母が卒業生なので	1					1			2
11 姉妹が卒業生或は在學生なので				2			1		3
12 その他、先輩、親類、知人が卒業生で 勧められたから		1	2	1	4	2	1		11
13 自分は付属高校出身なので									0
14 上記以外（立派な教授陣、寮がある、 緑の多い校内、通学に便利、受験に英 語・数学がない、学費安い等）	1			2	5	1	1	4	14
15 回答なし					3		1		4

設問3：本学を選んだ理由 集計表（短大）

短大卒業年度	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	総計
1 女性の自立・向上に積極的に取り組む 大学、仕事をもって働きたい			2	1	5			2	10
2 栄養士・保育士・幼稚園教諭・家庭科 教師資格、被服の知識・技能修得		1	1	4	10	9	4	7	36
3 良妻賢母校として伝統があり評価が高 い、良き家庭人になる		1	5	1	5	3	7	4	26
4 父母ほか家族、親類からの勧め		1	6	6	8	4	11	5	41
5 児童心理学、青年心理学の第一人者で ある青木先生への尊敬、憧れ	1		6	5	5	4	8	4	33
6 児童心理学で名声の高い山下先生がお られるので			2					1	3
7 東京女子専門学校・東京家政大学卒の 高校教師からの勧め		1	9	9	2	8	8	6	43
8 特に卒業生である言及のない高校教師 からの勧め			5	7		9	5	4	30
9 母が卒業生なので			2				2	1	5
10 祖母が卒業生なので			1	1			1	1	4
11 姉妹が卒業生或は在学生なので				1	1			1	3
12 その他、先輩、親類、知人が卒業生で 勧められたから		1	5	2	5	3	4	3	23
13 自分は付属高校出身なので			1		1	1	1	1	5
14 上記以外（立派な教授陣、寮がある、 緑の多い校内、通学に便利、受験に英 語・数学がない、学費安い等）		2	6	7	4	13	6	2	40
15 回答なし				2	3	1	3	2	11

設問4 「入学のときの希望や夢」

教職や栄養士等の資格、被服の知識・技術の修得などの希望者は、大学では合計 23 名、短大では合計 105 名に及びます。この数に、自立した一人前の職業人、社会人になりたいとの希望者の数を加えるべきでしょう。大学は 16 名、短大は 33 名。

なお、女性としての成長や教養を高めたいと回答した大学卒 4 名、短大卒 13 名、それに、良妻賢母の教養を身につけ良い家庭人になりたいと回答した大学卒 3 名、短大卒 13 名は、資格取得や技術修得を希望していなかったと判断できません。希望や夢が重複していたと見るべきでしょう。130 年前に創立された学園の理念が、女性も技を身につけて自立する、にあるので、その伝統から自立した職業人の希望や夢も併せて持っていたと推定されます。

以下、大学・短大の回答例です。

A 大 学

- 1 昭和 28 年卒、H.S さん「日本一といわれる先生について学べる幸せを感じました」
- 2 昭和 28 年卒、Y.M さん「衣生活の向上」
- 3 昭和 31 年卒、U.F さん「子供が好きでしたから、児童心理学を学び、それを生かした方面の仕事を将来したいと思いました」
- 4 昭和 31 年卒、T.A さん「学校の穏やかな雰囲気につつまれ、青木学長の訓示を伺って、それまで漠然としていた私の気持は「思い切り勉強して、人や社会に役立つ人間になりたい」とはっきり意識するようになりました」
- 5 昭和 32 年卒、T.K さん「東京への淡い憧れと自立した女性になる事」
- 6 昭和 34 年卒、K.M さん「子どもの心の医者になりたい！」

B 短 大

- 1 昭和 27 年卒、T.N さん「新制度の大学で勉強できる喜びに満ちあふれていました。小学校、女学校とほとんどを戦争に翻弄されてしまったから」
- 2 昭和 28 年卒、N.Y さん「家庭科の好きな私は信じて上京。家庭に入ってもよし、職業として自立してもよし・・・と漠然と上京入学したと思う。未熟なままの娘の感性はここで育った」
- 3 昭和 29 年卒、W.K さん「栄養学を修め、郷里の食生活改善につとめたいと考えていた」
- 4 昭和 31 年卒、I.K さん「自立した女性！」
- 5 昭和 33 年卒、K.T さん「人間の根本である家庭生活を充実できるように学びたかった」
- 6 昭和 33 年卒、T.M さん「入学試験の面接時に、学長先生にお会いして親しみやすい会話を交わす事が出来て、この学校で栄養士の資格を身につけようと思いました」

設問4：入学のときの希望や夢 集計表（大学）

大 学 卒 業 年 度	28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	35年	総計
1 自立した女性、社会的に一人前の職業人、人や社会に役立つ人間			4	1	3	1	2	5	16
2 一人の女性としての成長、広い視野をもつ大人、教養を高めたい、広く世界を見たい	2		1					1	4
3 立派な家庭科等の教師になりたい、新時代の教育の充実	1	2		3		3	1		10
4 栄養士の資格、健康と食生活の向上、食品関係の仕事等					2		1	2	5
5 子供に興味、心理学の勉強、児童の生活向上、保育園・幼稚園で働く	1	1		2			1		5
6 衣生活の向上、自分の手で洋裁・和裁を仕立てたい、デザイナー	1					1		1	3
7 良妻賢母の教養をつけたい、良き家庭人、すばらしい家庭の主婦				2	1				3
8 勉強ができる嬉しさ、学ぶ喜び、第一人者の青木先生から学びたい	1				1	1		1	4
9 一生付き合える良い友達をつくる、多くの友達と接したい			2						2
10 東京への憧れ、都会でいろいろな事を吸収したい、都会での青春					1	1	1		3
11 寮生活の体験、全国の友人から郷里の話を聞く等	1								1
12 当面は不安ばかり、不安の方が大きかった				1		1			2
13 その他の夢と希望（地方公務員、地域社会への貢献など）					1				1
14 特に夢と希望はない、なんとなく				1	1				2
15 回答なし		1		1	3		1		6

設問4：入学のときの希望と夢 集計表（短大）

短大卒業年度	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	総計
1 自立した女性、社会的に一人前の職業人、人や社会に役立つ人間			4	5	6	12	2	4	33
2 一人の女性としての成長、広い視野をもつ大人、教養を高めたい、広く世界を見たい			4	3	2	2		2	13
3 立派な家庭科等の教師になりたい	1	2	8	4	3	8	9	7	42
4 栄養士の資格、健康と食生活の向上、食品関係の仕事等			1	5	10	16	8	8	48
5 子供に興味、心理学の勉強、児童の生活向上、保育園・幼稚園で働く			1	2	1		1	1	6
6 衣生活の向上、自分の手で洋裁・和裁を仕立てたい、デザイナー			3	3	3				9
7 良妻賢母の教養をつけたい、良き家庭人、すばらしい家庭の主婦			4	1		3	2	3	13
8 勉強ができる嬉しさ、学ぶ喜び、第一人者の青木先生から学びたい		1	2	1	2		2	2	10
9 一生付き合える良い友達をつくる、多くの友達と接したい					1		1	1	3
10 東京への憧れ、都会でいろいろな事を吸収したい、都会での青春			1	6	4	3	5	5	24
11 寮生活の体験、全国の友人から郷里の話を聞く等				1			3		4
12 当面は不安ばかり、不安の方が大きかった				2					2
13 その他の夢と希望（地方公務員、地域社会への貢献など）		1		1	1			1	4
14 特に夢と希望はない、なんとなく			1		1	1	2	3	8
15 回答なし		1	2	2	7	6	4	4	26

設問5 「入学式の青木学長訓示の内容」

この設問は答えるのがかなり難しいと思います。私自身も大学入学時の学長の言葉はほとんど覚えていません。卒業生の多くの方も、式では緊張していたので先生の話は断片的にしか覚えていない旨の回答をされています。

まず気づいた点は、生活信条に関連する話が昭和26年の入学式で言及されていることです。その後、学長在任中の全入学式でも話されていたことが確認できます。女性の自立、或は自主自律については昭和24年の最初の入学式から説かれています。これは生活信条のベースになる考え方なので、開校当初から、生活信条の原型に当たるような訓示をされていたと推測できます。

また当然のことですが、大学・短大での勉学の心構えについて諄々と説いていたようです。その内容は在学生に対する水曜講演でも再三取り上げているテーマでした。更に、これは先生の人格の表われですが、両親に対して、今まで育ててくれたこと、そして経済的にもたいへんな時期に大学・短大への入学を許可してくれたことについて感謝するよう求めています。母の日に学生にプレゼントした自筆のカーネーションの絵カードに通じる思いがそこに表われています。以下、集計結果です。

- ・昭和24年度入学式についての回答（昭和28年大学卒＋昭和26年短大卒）
 - 1 女性の自立・独立、自分のことは自身で全責任 3名
 - 2 婦人の向上を目指し勉強を 1名
- ・昭和25年度入学式についての回答（昭和29年大学卒＋昭和27年短大卒）

回答なし 0名
- ・昭和26年度入学式についての回答（昭和30年大学卒＋昭和28年短大卒）
 - 1 今日があることに両親に感謝 3名
 - 2 生活信条に関連する話 3名
 - 3 その他 5名
- ・昭和27年度入学式についての回答（昭和31年大学卒＋昭和29年短大卒）
 - 1 生活信条に関連する話 4名
 - 2 女子の大学進学率が少ない、今まで育ててくれた
両親に感謝 10名
 - 3 その他 4名
- ・昭和28年度入学式についての回答（昭和32年大学卒＋昭和30年短大卒）
 - 1 生活信条（及び鳩の校章）の話 8名
 - 2 自立した生き方、良き社会人 5名
 - 3 その他 2名

- ・昭和 29 年度入学式についての回答（昭和 33 年大学卒＋昭和 31 年短大卒）
 - 1 生活信条に関連する話 5 名
 - 2 考えることを学び学問追求を 3 名
 - 3 その他 3 名
- ・昭和 30 年度入学式についての回答（昭和 34 年大学卒＋昭和 32 年短大卒）
 - 1 生活信条に関連する話 13 名
 - 2 学生として勉学に勤しむように 3 名
 - 3 その他 2 名
- ・昭和 31 年度入学式についての回答（昭和 35 年大学卒＋昭和 33 年短大卒）
 - 1 生活信条に関連する話 5 名
 - 2 学ぶことを楽しみ勉学に励もう 3 名
 - 3 その他 5 名

入学式の訓示そのものの資料が入手できないので、昭和 28 年 4 月の水曜講演『新入生のためのオリエンテーション』を参考に、先生が新入生にぜひとも伝えたかった 9 のテーマのうち、下記の 4 つを要約します。

- I 学校と学生：「この学校はどこまでもあなた方の味方。あなた方を信頼している」 学生・先生が「にこやかに愛しあって、明るい幸福な学校生活を作っていくようにしたい」
- II 大学の精神：この学校は、愛情・勤勉・聡明の 3 つの精神をもっている。「その根本になるのは他に対する愛情。ひらたくいえば、お互いが親切にし合うこと、お互いが助け合うこと」。次に、「聡明にということとは、要するに自分で考えること、考える力をつくること」。最後の「勤勉とは、愛情を示してそれを実際に現し、聡明な判断を実行し他の生活を幸福にし自分の生活を進歩させること」
- III 勉強のこと：学生の本分は勉学。出席が必要であり休暇以外はアルバイト禁止。授業で分からないことは必ず質問すること。図書館を十分に利用すること。
- IV 学校の行事：学校はひとつの共同した集団として共同の行事をもっている。例えば、ホーム・カミング・デイ、レクリエーション、キャンプ・ファイヤー、学生祭、クリスマス等々。「これらは遊びではなく、共同の態度、共にする仕事によっての友人の発見、共同生活の進歩という大きな意味がある」

先生が最も強調して伝えたいことは、この大学の学風が、先生と学生、そして学生同士、愛情に満ちた共同の学生生活を送ることにある、という一点です。新入生は、その温かい歓迎の言葉に、未来が明るく開かれる思いを抱いたのではないのでしょうか。

設問6 「一番印象に残っている感銘を受けた水曜講演」

大学・短大を併せて、以下の結果が出ました。回答数の多い順に並べます。

- 1位（11名）：27年5月9日「母の日について」
- 2位（8名）：27年4月「真の美しさ」、30年10月14日「鍛錬」
- 3位（6名）：30年11月2日「愛情」、30年11月16日「誠実」
- 4位（5名）：27年10月22日「困難に対する心」、29年4月「愛情と勤勉と聡明」、
29年7月10日「家郷を省みる」、29年11月10日「服装について」
30年6月1日「行動と自己表現」
- 5位（4名）：27年2月6日「人に迷惑をかけない」
- 6位（3名）：26年6月5日「時間の使い方」、26年11月28日「勉学の精進」
27年5月26日「人を愛する」、27年6月18日「友情について」
30年7月9日「夏の生活」
- 7位（2名）：27年5月14日「大学の学生」、28年2月11日「人間性の尊重」
28年4月11日「女子学生としての心がけ」、28年4月「新入生のための
オリエンテーション」、28年7月10日「夏季休業の過ごし方」、
30年11月2日「知的な強さ」
- 8位（1名）：26年3月「生活設計」、26年9月「自己の確立」、
27年1月11日「生活と理想」、27年4月16日「美しさの第一歩」、
27年9月11日「新しい努力」、28年1月21日「勉学の目的」、
28年「感情と理性と聡明」、28年「行動力・労働・勤勉」、
29年1月「生活に対する態度」、29年2月3日「消費ブームの生活」、
29年4月「始業に臨んで心構え」、29年6月30日「学生の進むべき道」、
30年1月「労苦に耐える」、30年4月「学生の特権と義務」、
30年6月15日「生活を愛する」、30年6月29日「生活と習慣」、
30年12月7日「無題」、30年12月「問題を持つこと」、
31年4月「実力をつけること」、31年4月「求めて幸福なこと」、
31年10月15日「人々の恩愛」、31年11月14日「学生祭についての反省」

順位5位までの11回の水曜講演については、以下、概略を兼ねて解説します。
なお各講演そのものに関心ある方は、ご著書の『若い女性（ひと）』（復刻版）、東京家政大学
出版部、2009年を参照ください。



「水曜講演の様子」

～ 東京家政大学博物館より提供

1 「母の日について」(27.5.9)：まず、母の日の意義を3点述べています。

第一に、母の子への愛は無私の愛であり、「この日に母の心をとともにふりかえって、各自が自らの母への感謝の祈りを捧げたいと思う」。

第二に、戦前は女性の人権が認められず、その労苦は当然とされ、苦しさについて注意を払われていなかったが、母の日は「こういう（封建的）時代からの脱皮を、進歩を意味する」。そういう意味で、社会が女性全体へ感謝を捧げる日でもある。

第三に、「女性が自らの生活の充実と進歩を誓う日でありたい」

先生は学生に次のことを求めています。

- ① 当日、「家にある人は一日おかあさんを解放し、あなた方がすべておかあさんの労を代わってあげなさい」
- ② 地方から来ている人は、「必ずおかあさんにたよりをかきなさい。できるならば何か自分の手で作ってどんなささやかなものでもおかあさんに送ってあげなさい」
- ③ 短大2年生、大学4年生の人は今年で最後であるが、「来年からこの日を忘れずに、あなた方の一生を通じてこの感謝を送ることを忘れないようにしてもらいたい」

先生は最後に、学生たちに次の自作の言葉を送り、これを母への手紙に書き添えてもらいたい旨述べます。

「いとけなき頃より母の胸にすがりしわれ
いまもなおわが胸に通うその思い
母よ 健やかにあれ幸にあれ、われひとすじに祈る」

アンケートの回答によると、講演の際先生は手描きのカーネーションの絵を学生一人ひとりにプレゼントとして配ったとのこと。この葉書を送られた故郷の母親が感激して、それを額に入れて大事にとっていた等の報告が多く散見できました。

先生ご自身のお母様に対する思いは、31年大学卒のT.Mさんの感想にもにじみ出ています。「先生はお母様のお話をされる時は、お声がつまり気味でした。お母様に深い愛情をお持ちでいらっしやいました」先生が家政系の大学の学長職を引き受けた理由も、幼いころからまじかに見ていた母親の家事生活のたいへんさに心を痛め、世の母親の幸福を一途に祈る気持ちからであることは、**昭和30年12月7日の講演**から了解できます。少し長いですが引用しましょう。

「私は早くから日本人の生活技術の貧困を痛感し、日本人を幸福にするには、更に自分の幼い時からの経験として母親の生活などを見て、日本の婦人がもっと幸福にならなければならない、それにはまず婦人の生活技術の水準を上げてそこから婦人が解放されていかなければならないと考えていた。そのためには、この婦人の指導者の教育は極めて大切なことと考えていたので、そういう考え方が頭をもちあげて来て、一つそういう理想的な学園を作ってそこに自分の残った人生を投げ込もうと考えた。その意味において私は、ここに学ぶ学生の心の故郷を作り、日本に誇る学園・殿堂を築きあげたいという念願でこの学校をひきうけた。この気持ちは今において変わらない」

2 「真の美しさ」(27.4?) : 27年4月16日の講演「美しさへの第一歩」で先生は、美しくあることに学生たちが関心を持つことに十分理解を示しています。しかし華美に陥りがちな当今の傾向に問題があることも指摘。むしろ、身体や装いの清潔さ、姿勢・歩き方の美しさ、環境（ここでは教育環境としての学内の道や教室等）の清潔さが美しさの必要条件ではないか、と問いかけ、話の後半は、環境の美、特に学校の清らかな美しさを実現するために学生に協力を求めます。曰く、学内の道がびかびかになるくらい清掃し、教室の机上や床を徹底的にきれいにし、落ちていた紙屑・木の枝を皆無にするようにしてください。

講演「真の美しさ」では、外面ではなく内面の美しさ、「人間の心の美しさ」を強調し、「真の美しさ」の3条件を説いています。

- ①「ほんとうに自分の生活を考えて、そこに本当の人生を求める」
- ②「人間の生活に対して深い愛情をもって接する」
- ③「勉強によって学問の道に精進する」

最後に、最近のエピソードを紹介。「ある人から、この学校へ来ている人が郷里に帰って、どこの学生よりも質素だが顔つきがきれいだということをしていわれて、これこそわれわれの目指しているところと喜んだ」ということですが、真に心の美しい人になってほしい、という先生の願いが直截に表れている講演だと思います。

3 「鍛錬」(30.10.14) : 家政系の生活技術の修得過程は簡単ではなく労苦が多いが、自ら進んで鍛錬する（これには学習、試験も含まれる）という気持ちが大切であることを指摘すると同時に、一生の生き方においても鍛錬が重要であることを説いている講話。

まず学生に身近な試験について。「試験勉強は苦しいに相違ない。しかしそれにたえてすべて我々の生活、勉強をいわゆる修業と考え、心の底から学問なり生活なりを考え、そこに鍛錬を加えていくということは、我々の一生の幸福ということからいうと極めて大切なことだというよりは、むしろ生活の根本を作ることだといえる」 そういう真摯な気持ちで、試験勉強に限らず難儀の多いこれからの学生生活、更には今後の人生の大海原を乗り越えていつてほしいというのが先生の願いでしょう。

「苦しいと放棄する、いやになると捨てる、不平をいう、そういう生活は不幸な生活だが同時にそのようにして、ほんとうに自分の熟練した技術、深い自信のある力をもたない人におそらく幸福な生活は来ないと思う」

先生はこの「心の底からの修業」或は「鍛錬」が、「私の求める（生活信条の）勤勉」に当たると説明します。

しかしこの鍛錬＝勤勉も、先生に言われたから仕方なくするのではなく、自発的に自ら進んですることに意義があります。

「これからの学習においても学生祭についても、この自ら進んで自らの心の底から鍛錬を加える、その心構えでその日その日を充実してもらいたい」

日々、授業・試験・実習に追われてバテ気味の学生たちにとって、心底、肝に刺さった講演だったと思われます。

4 「愛情」(30.11.2)：昭和27年4月28日の対日講和条約発効を前に、4月3日の水曜講演「独立日本」では、民主主義国として独立していくための原理が易しい言葉で次のように説かれています。

「常の生活において人を尊び、人を愛し、他を大切に、人の迷惑にならない生活をする、それが生活の隅々にゆきわたること、これこそ民主的生活」なので、心してそのような生活を心がけてほしい、と学生に訴えているわけです。先生の講演で謳われる「愛情」は、個人と個人の親密な愛情を意味するだけでなく、民主主義社会を構成する根本原理でもある点に注意しなくてはなりません。

この講演で先生は、まず利己的な愛情と「真の愛情」を区別します。利己的な愛情とは、「自分が好きで愛しないではいけないとか、自分の喜びとして愛しないではいけないとかいうような、いわば自分のための愛」。それに対して真の愛情とは「そういう利己的なものからぬけ出てその人の心をいたわりその人を高めていこうとする、そういう心に見られるもの」

この他者に対する「いたわり」とか「高めていく」こととしての愛情については、既に28年4月の「愛情の問題」でその真意が説かれています。第三部の第3論文を参照ください。

そしてこの最も深い個人同士の関わりである真の愛情は、同時に「すべて我々が社会にあって、人々と共に幸福な生活をしていく上の根本を形作っているものということができる」。先生の説く「愛情」は、民主主義社会を構成する基礎としての人間関係をも意味し、そういう意味で社会的意義をもつのです。この講演では明確にそれが出ています。文部省官僚であった時期に、戦後の新しい科目である社会科の基礎づけに関わった先生の脳裏にあった原理とはこれであったと考えられます。この点についても第三部の私の第2論文を参照ください。

5 「誠実」(30.11.16)：かつて、ドイツ・ケルンのゴシック式聖堂の高い塔で精巧な花びらの彫刻をしている彫刻家に向かって、一人の技師がそんな細かい仕事をしてても下からは全然見えないので無駄ではないか、と述べたところその彫刻家が答えて曰く、「べつに下から見てもらうためにしているではありません。私がこの仕事を捧げているおおいなる方、この仕事を見て下さるお方は、上のほうから見ていただけるのです」

先生はこの話に感銘を受けて、「これこそ我々の良心の言葉ともいえると思う。それは誠実ということだと思う」と「誠実」の意味を説くとともに、学生に「我々はともすると表面的な人の眼にふれて体裁さえよければよいというような仕事をする人が多いのではないか、自分の良心に恥じない、神がそれを見て喜ぶような仕事をしているだろうか」、そして「例えば」と切り込む、「毎日の勉強、先生に出すレポート、どういう心持でやっているだろうか」。レポートを人に書いてもらったり、他人のものを写したり、実習の時に手抜きをしたり、ともかく見えてところの体裁を繕うことをやっていないだろうか。

最後に痛烈な文言で締めくくる。

「人には見破られないかもしれない、しかし神様はそれを見ておられる。神を信じない人でも自分の良心はよくそれを見ている。そういうことを思ってみてほしい」

教育・研究などの面で、先生ご自身が手抜きやごまかしをせず誠を貫こうとしたことはその行跡から明瞭であると思います。

6 「困難に対する心」(27.10.22)：この講演では、愛情・勤勉・聡明とは異なりますが、一種の生活信条が語られています。困難な状況において必要とされる**希望・努力・忍耐**。

困難とはどのような状況か。「自分の考えるようにはいかない。そこに困難がある」。しかも「困難は常のこと」。先生は自分を省みて、「自分の学問についても、また教師という仕事から学生を相手にする仕事についても毎日の些細なことでも思うようにいかない」。先生のように自分の仕事に誠実であろうと思えば思うほど、大小さまざまな困難に遭遇するのだと思います。それでは困難に対してどのように対処したらよいでしょうか。

「困難なことでも希望をすてずに一步前へ出る。一步でもよいから前へ出る。いやにならないでがまんする。それ以外にみちはないと思っている」

私はこれを希望・努力・忍耐という先生提案の生活信条の一種であると捉えています。

学生に示した具体的な困難状況は以下のようなことです。学問・技術を身に着けること、クラス委員がクラスをまとめていく仕事、毎朝定刻に学校に出席すること、室の掃除をすること、寮で団体生活をする事等。これらは自分の考えるようにはいかないやっかいなことであり、いやになったり面倒くさくなって、途中であきらめ挫折したり、或は易きについて端折ったりしてごまかしたりしがちです。結局「生活を崩すものになる」。

先生の処方箋。学校生活に限らず、戦後の社会全般には切迫した困難が多いが、「そういうときにはいつも自分の考えがいつかは実現されるという希望を失わないで努力する。そこに人間の生活が確かになり、更にまた困難に打ち勝っていく力が養われると思う」

講演は学生への次の呼びかけで終わっています。

「忍耐と努力と、いつも明るい希望をもって日常の困難なことにぶつかってもらいたい」

「いたわり」の愛情という考え方と同時に、「明るい」希望という考え方が先生の教育理念をよく表していると思います。

7 「愛情と勤勉と聡明」(29.4?)：この講演では生活信条の3徳が明確に説明されています。この3徳について、「学生の生活を指導する方針」であり、この学園の学風をつくる「生活の精神」であると定義します。

「愛情」を先生は「**大学の第一の生活の精神**」とみなし、「お互いが愛情をもって結び、それを包んで他に対すること」であり、具体的には「親切にすること、その人のために働くこと、その人の身になってやってもらいたいと思うことをしてやること、やってもらいたくないと思うようなことをしないこと」と分り易く説明します。他の講演で何度も指摘されていますが、先生の「愛情」は「他者へのいたわり」と同義です。しかもこの「いたわり」はこの大学だけでなく、戦後日本が目指す民主主義的社会的「第一の生活の精神」でもあると先生は考えていたと思われます。これについては第3部の私の第2論文を参照。

ところで、何故「いたわり」が人間関係の根本なのか？ その理由については、28年4月？の講演「愛情の問題」で掘り下げて説明しています。第3部の第3論文を参照ください。

次に「勤勉」ですが、これは27年4月3日の「独立日本の歩み」の中で「(独立後)日本の狭い国土において八千三百万人の人間が生きていくには勤勉ということがかけがえのない生活の力」であるとして懸命に働くことの脈絡のなかで取り上げていますが、この日の講演での「勤勉」はあくまで第一の生活の精神である「愛情」のための勤勉です。曰く、

「愛情の深い生活をするためには、(お題目を唱えるだけでなく)自分の身を動かさなければならぬ。その実行が要求されるから」

学生の立場からの極めて具体的な例として、「掃除する、自分の身のまわりをきれいにし、学内のさまざまな作業をする」等。何故これが愛情の実践なのか。きれいで清潔な教育・学習環境で気持ちよく授業を受け勉学に励み、その他の学生生活を送ることは、自分の為でもあり同時に他の学生のためでもあるからであり、この目的を単に理想にとどめず、互いに協力してその実現のために働く、ということが先生の考える「愛情の実行としての勤勉」なのでしょう。

ここで称揚する「聡明」も「愛情」及び「愛情の実行としての勤勉」に関係します。

「愛情といっても本能的な愛情であってならない。すなわち、考えること、聡明さが必要」更に「働くといっても、ただ動物のように働くというのでならない。よく考えられた生活を営まなければならない」

以上の考えを総括して、「まず他に対して愛情をもつてのぞみ、毎日の生活において毎日の勉強において勤勉で、毎日の生活を考へてする」よう学生に呼びかけています。

しかしこの愛情・勤勉・聡明の生活精神を学長から言われたから実行する、というのではなく、著書『青年心理学』で強調したように、青年の特色である自主自律の観点から、校風を表す生活信条が学生各自の「生活において(自主自発的に)行われ、自らの生活を作っていくことを」先生は「期待する」。

8 「家郷を省みる」(29.7.10)：この講話は夏休みに入るに当たっての先生からのアドバイスという点で、28年7月10日の「夏季休業の過ごし方」、30年7月9日の「夏の生活」と内容はほぼ同様です。しかし28年の方では、基本型となるような講話になっています。まず、全国に夏休みが作られた根本の理由が説明されます。

①温度と学習能率、②疲労、抵抗力、身体保護の時、③学生にとっては日常の生活からの解放、自由な生活、④教師の勉強期間

学生が解放され自由な生活ができるこの時期に、どのような仕事が可能かについて先生からの提案例。

①何かまとまった仕事をする、②その他、家事の全部をあずかる、③村で子供の休み中の指導をする、④論文の仕事がある程度進める、⑤旅行をする(アンケート回答によると、軽井沢の先生の別荘に寄ることができる)、⑥家でできる実習を重ねる、等

夏休みの心構えとしては、「とにかく休みに陥りがちな生活の不規則や飲食の不摂生というこ

とをさけて自分の心もからだも一段と健康を加えるように」との忠告。

最後に、両親と出身校の先生方への対応が諄々と説かれています。これは夏休みに関する先生のアドバイスの特徴であり、アンケート回答では多くの方がこの点を記憶していました。

両親に対しては「家に帰ったらまず、ただいま、をして自分の留守中の心遣いについて長いこといろいろご心配をかけたことを感謝する」

学校の先生方へは「帰ったら必ず帰った翌日にも学校にいて、かつての担任の先生や校長先生に挨拶する。そして学校のこと、自分の勉強のことを報告する」。なぜなら「先生方は私があなた方のことを心配していると同様に心配していただけるのだから、こういう挨拶をすることは当然」最後に、全員元気でここにまた顔を合わせることができると祈るといふ祈念の言葉で終わっています。

29年の講演「家郷を省みる」では、この両親と出身校の先生への対応が前面に出ている話になっています。興味深い点は、楽しげな最後の呼びかけです。

「しばらくの別れに、今日は火を焚いて皆で楽しい夕べを過ごそう」

学生たちはそれに呼応して声を出して大喜びしたのではないのでしょうか。卒業生の回答中、印象に残る行事として、多数の人が夏休み前のキャンプファイヤーを挙げていますが、学生・教職員が共に焚火を囲み歌をうたい踊りなどしながら、長く厳しかった授業や仕事からのいつときの解放をみんなで共有したのではないのでしょうか。

9 「服装について」(29. 11. 10)：前年度にファッションモデルの伊東絹子がミス・ユニバースに3位入賞したことをきっかけに、顔の美だけでなく8頭身を代表する体形の美に高い関心が生まれ、29年には体形の美に触発されて、体の健康美を追及する竹腰美代子のNHKテレビ美容体操がスタート。またファッションショーも流行し、前年11月のクリスチャン・ディオールのファッションショーでは最高の盛り上がりを見せ、その影響によって頭のとっぺんから足先に至るまで(帽子、髪型、化粧、洋服、靴など)パリ・モードを模範とする装いの美に対する憧れがいやが上にも高まっていきました。

更に、29年度は4月に封切りの『ローマの休日』が大ヒットし、ヒロインのオードリー・ヘップバーンの髪型(ヘップバーンカット)を好んでまねる女性が続出。29年の電気洗濯機・冷蔵庫・掃除機の三種の神器、30年の電気釜の発売で家事の負担が軽減されたことによって、装いの美に対する関心に拍車がかけていきました。こういう時勢の急激な変化を青木先生は学生の生活態度のなかに敏感に感じ取ります。

この講話では、先生の装いの美についての哲学が語られます。

まず、最近卒業した人にあって驚いた体験から話を始めています。華美に着飾り、濃い口紅を塗り、眉をかき、アイシャドーを塗っているので、挨拶されてもどこの誰だかわからなかったとのこと。感心しないと厳しく批判しています。出席の学生でどきっとした人もいたのではないのでしょうか。

そもそも「服装をととのえる」とはどういう意味を持つのかについて、先生は2点挙げています。

- ① 「接する人に好感をもってもらいたいという社会的意義」。不潔であったり不統一な服装は人にいやな気持を与えるので反・社会的意義ともいえる。例えば、とって先生が取り上げるのが、赤い服、けばけばしいみなり、濃い口紅、悪趣味なアメリカ風の身なり、おしゃれズボン等。果たしてこれらは「何よりもまず周囲のものにいい気持ちを起こさせるだろうか。私などはギョッとする」このような服装や化粧は「すでに社会的な意味をもっていない」。
- ② 「服装で自分を表して自分をよく見せようとする気持ちがある」。それでは、「はでな身なりは外から見ると自分に自分をよく見せているか」むしろ本人が「不聡明、不堅実であることを表現している」ことになり、結局、自分を悪く見せていることになるのではないかということです。

しかし先生はおしゃれを否定しているわけではない。

「私は、娘さかりの若い人におしゃれをしてはいけないなどというのではない。おしゃれも結構。服装をととのえることも結構であるが、それは①社会の接する人々に好感を与え、②あなた方の聡明さと清純さが表現されることが望ましい工夫においてである」

先生が学生たちに推薦する美とは、「何よりも若い女性のもっている清純さを服装で現すこと」。具体的には、清潔な服装。更に「(特に、勉強中の)若い女性には簡素な美しさを求めたい」。具体的には、「十分質素を旨とする」服装。

この講話を先生は、あなたたち「若い女性がほんとうの意味においておしゃれをすることを願ってやまない」と結んでいます。どのような装い(化粧、服装等)が真におしゃれとみなされるのか、衣の時代が始まったといわれる世相のただ中にいる学生たちに、衣の意味について考える課題が与えられたと言えます。

10 「行動と自己表現」(30.6.1)：この講話でも、服装は自己表現なり、との考えが取り上げられます。しかし、その前提は「**服装は自己表現であるべきである**」ということです。単なる真似は「いわば自己というものが無いことを示している。自分の心の空白さ、自主性のなさを示すもの」

先生の念頭にあるのは映画『ローマの休日』で王女に扮したヘップバーンがカットした髪型。後のツイギーのミニ・スカートと同様、一世を風靡したこのヘアスタイルの人を見かけると、「これが自分にはよいという人は別だが、そうでない場合は結局自主性のない自分をそこに表現しているといわなくてはならない。つまり私というものは空っぽな人である」厳しい批評である。思わず自分の頭に手を当てた学生もいたのではないのでしょうか。

先生の考えは、服装はその人を表現しているべきである、というものです。しかし、その人を表現しているといっても、「ひどくあくどい化粧をしたり、あくどい服装をしたり髪形をしている」場合、或は「コケティッシュな化粧をしたり表現をしたりする人の場合」はどうでしょう。確かにその人の精神が現れています。しかし、それらは「その人の精神のあくどさを示している。またコケティッシュな精神をあらわしている」こういう服装は、その人の「美の観念の貧しさをあらわし、聡明ならざる精神をあらわしているといわなくてはならない」

それでは先生が学生に勧める美の観念とはどのようなものでしょう。「若い人達は、そこに青年の澁刺さを増す、またその清純さを増す簡素な美しさ清純な美しさを美しさと思わないだろうか」清潔さ或は清純さ、質素或は簡素。先生が若い人に勧める美の観念はこのような内容です。

講話の後半から、服装だけでなく起居動作そのものがその人の精神をあらわす、という本論に話が進んでいきます。

「起居動作といわれるものはそのことだけで終わるのではなく、それがその人の心を表現するものといわなくてはならない」

例：横断歩道を無視して斜（はず）に横切る人。それは「粗雑な心の動きを示している」
「ただ近道を通ろうとして社会の規定を無視する心の現れ」

先生は、このような易きにつく行為を他の講演なども取り上げ、イージー・ゴーイングという言葉で表現していました。或る卒業生の回答では、このイージー・ゴーイングをずっと覚えていて、先生の教えの通り、道を斜めに渡ることは決してなかったと回顧しています。

その他、「言葉のぞんざいなつかい方、丁寧なつかい方、物の取り扱い方、すべてその人の精神の表現」従って、正しい精神のあり方にこそ配慮をすべき、ということです。

正しい精神はどのように養われるのか。「自分の心を正しくしていくために行動を正しくするという方法が多く取られている」ここに循環が認められます。精神を正しくすると行動も正しくなる、というだけでなく逆に、行動を正しくする（例えば、欲望をコントロールしたり不正な行為を慎んだりする）と精神も正しくなっていく。良循環が生まれています。

若い人は自己形成の途上にあるので、特にこの良循環を保つよう一層の配慮が必要である、ということで、次の諭す言葉で講話を終えています。

「我々は知性をみがき、そこから行動について考え、また行動をコントロールすることによって、自らの精神を正しくしていくことを心がけなければならないのはいだろうか」

この同じ年の7月、石原慎太郎の『太陽の季節』が『文学界』に掲載され、欲望をコントロールせず無軌道な行動を是とする太陽族のような若者が世を席卷していくこととなります。戦前の自主性を抑圧する教育の反動でもありますが、自己責任を伴う自主性を身に着けるどころか、自ら考える自己形成すら嫌って、先生の言葉を用いれば、「私というものが空っぽである」ことを自由であると勘違いする世代の輩出です。そういう時代の雰囲気を知りつつの辛口の講演だったと考えられます。

11 「人に迷惑をかけない」(27.2.6)：この講演では、人に迷惑をかけることが他を愛するという心のともしびを消すことになると指摘し、極力「人に迷惑をかけないよう」注意を促しています。具体的には、公共物である教室を汚さないとか、講義中おしゃべりして秩序を乱さないとか、他に対して思いやりに欠けることはしない、といったことです。最後に、卒業間近の学生達に対して、在学中に「育てられた愛情ある生活をさらに継いでいくように」とのはなむけの言葉をおくり、在学学生に対しては、「受け継いだ愛情ある伝統を一層高めて、幸福な学園の生活を作ること一段の努力をしてもらいたい」と励ましの言葉を伝えています。生活信条の愛情の精神が当時既に学園中に染みわたっていたことをうかがい知ることができます。

設問7 「水曜講演の青木先生の声、口調、表情、態度等」

声、口調、表情、態度等に関する多様な修飾語による描写のうち、回答数の多い特徴ある修飾語を優先的に取り出すと次のようになります。

- 1 声について：約 50 の修飾語のうち「低い〈声〉」が約 20 回答、「おだやか、やさしい、やわらかな（声）」を同種類とみなして約 15 回答。
- 2 口調について：約 70 強の修飾語のうち、「ゆっくりと、ゆったりと、おだやかな」を同種類とみなして約 44 回答。「（もの）静か」が 9 回答。
- 3 話し方について：約 60 の修飾語のうち、「分りやすい」が 9 回答、「一人ひとりに話しかけるように」が 6 回答、「諭すよう」が 5 回答。
- 4 表情について：約 95 の修飾語のうち、圧倒的に「笑顔、笑み、にこやか、にこにこ」が過半数で約 50 回答、「優しい眼差し、表情」が 18 回答、「おだやかな表情」が 12 回答。
- 5 態度について：約 50 強の修飾語のうち、「やさしい（やさしさそのもの）」が 13 回答、「慈愛に満ち溢れた」が 7 回答、「おだやか」が 7、「（父親のような）愛情ある親しみやすさ」が 5 回答。
- 6 その他：講演の様子について 2 例を上げると、「講演机の上に手をおき、身を前に乗り出して生徒を満遍なくご覧になりながら」「教卓の上に講演メモを置き腰かけて」。その体格から布袋様・大黒様のように、といった記述も散見できます。学生達は親しみを込めて、密かに、柔らかなカバ先生とか、陸上のカバ先生とか、キューピーといったニックネームをつけていたらしい。

以上は、先生の講演の様子についての記述を声とか話し方などと項目別に分けてまとめ、それぞれの特徴をくっきりと浮き彫りにしましたが、私個人の 70 年余の人生で「いつもにこやかに笑顔を浮かべて、優しい眼差しをもって、慈愛に満ち溢れた態度で、一言ひとこと分るように話してくれる」教師はもとより、そもそもそういう人に出会ったことがありません。稀有的人だと思えます。しかし、天性の教育者だから努力しなくてもよい、というわけでないことは、昭和 27 年 10 月 22 日の水曜講演「困難に対する心」からうかがうことができます。少々長いですが引用します。

「過去をふりかえっても、自分の考えるようにいかない。そこに困難があるということはこれは常のこと。自分の学問についても、また教師という仕事から学生を相手にする仕事についてみても毎日の些細なことでも思うようにいかない」。

こういう困難なことが解決できそうもないと、先生も「ごまかして安易な道をとろうとする。そういうことを常に経験する」。これに対処するにどうすればよいか。

「困難なことでも希望をすてずに一歩前へ出る。一歩でもよいから前へ出る。いやにならないでがまんする。それ以外に道はないと思っている」

長い年月、先生が自覚して養ってきた「困難に対する心」が、天性のものであるような慈愛に満ちた対話的教育に結実されていることがよく分ります。

設問8 「水曜講演以外の行事に関する思い出」

大学、短大にわたってほぼ同様の行事が思い出として挙げられています。大学・短大別の回答数の順位は以下のようです。

A 大学

1位	母の日に関する行事、学長手描きのカーネーションのカード	14名
1位	キャンプファイヤーでの歌やフォークダンス	14名
3位	学長の軽井沢の別荘にクラスが招待されて滞在	13名
4位	クリスマスの行事、学長のサンタクロース、手描きのカード	11名
5位	卒業式行事と記念プレゼント	4名
6位	農村実習	1名
7位	学長の学園葬	1名
	その他（学生祭、箱根の学生寮でのオリエンテーション、小旅行等）	14名

B 短大

1位	母の日に関する行事、学長手描きのカーネーションのカード	34名
2位	クリスマスの行事、学長のサンタクロース、手描きのカード	30名
3位	キャンプファイヤーでの歌やフォークダンス	23名
4位	卒業式行事と記念プレゼント	6名
5位	学長の軽井沢別荘にクラスが招待されて滞在	4名
6位	学長ほか教員達による老稚園のパフォーマンス	2名
	その他（学園葬、校章、学生出身地の石による校門の礎石づくり）	4名

以上から、母の日のカーネーションカード、クリスマスのカード、サンタに扮した学長、キャンプファイヤー及び軽井沢別荘の思い出が特に印象深いものとして記憶されています。大学、短大に分けて回答例を紹介しましょう。なお学長の学園葬は、設問11の「悲しかった事」で最多の回答となっています。

A 大学

1 母の日にまつわる思い出

- ・昭和28年卒、H.Sさん「先生自らおかき下さった葉書のカーネーション。遠く離れている母に心の想いと感激をこめて送ったこと。涙が出る位嬉しゅうございました」
- ・昭和33年卒、T.Hさん「初めてのカーネーション・カードを受け取った時、サーモンピンクに近い色・手描きで、全員が頂戴してびっくりしたり、大層感動しました」
- ・昭和33年卒、S.Aさん「昭和30年の母の日に青木先生からカーネーションのカードを頂きました。母に送りまして、亡くなってから針箱の中にあるのが見つかりました。懐かしく思い出しました」

2 キャンプファイヤーの思い出

- ・昭和30年卒、I.Tさん「附属の中学・高校そして大学が一体となつての学生祭を実施し、その打上げの日、夕暮れとなり木立ちの下で行われるキャンプファイヤーを囲んでのフォークダンスやスクウェアダンスには「ご苦労だったねー」とねぎらいの言葉をいただき、ゲームの輪には学長先生も入って下さり盛り上げて下さいました。企画した者としては大感激です。踊りの輪もとけ、一般学生が帰路に着きはじめると、役員はファイヤーの火を消し、後片付けが終わりになる頃、三木先生と学長先生に招かれて「さあ! 頑張ったね。おあがり!!」といつの間に炊いて下さったのか? 醤油味のおにぎりを出して下さいました。あの頃では貴重な品でとても美味しく、今もって忘れられず時々作って食べています。嬉しかったです」
- ・昭和31年卒、T.Aさん「毎年学生祭の後だったと思いますが、キャンプファイヤーが始まりました。学生と先生方が大きな輪になって手をつなぎ歌ったりおどったり、本当に楽しい一時でした。今は立派な校舎で一杯の学内ですが、当時は建物は少なく、おとぎの国の森のようでした」

3 学長の軽井沢別荘の思い出

- ・昭和28年卒、Y.Kさん「昭和27年5月、学部4年。浅間山の煙も美しい中軽井沢の青木学長様の別荘で、宿泊研修をさせて戴きました。小諸、軽井沢等、自転車で満悦し、木の香りも高い浴槽に滾々と溢れる温泉で瞑想に耽る、夢のような研修会でした」
- ・昭和29年卒、Y.Yさん「思い出しますと涙が出そうですが、先生の助手の方のお手配で先生の軽井沢の別荘に泊めて頂きました事、誠に稀有な事で被服専攻5名のクラス皆大喜びの旅でした。列車の中で学長先生は居ねむりをされた所をカメラで写されて沽券にかかかわるとちらっとご不満そうでしたが、その夜先生のベッドにこんにやくを忍ばせるというイタズラをしましたがおとがめ無しでした」
- ・昭和31年卒、T.Mさん「軽井沢沓掛の先生の御別荘に泊まり星野温泉に行きました。昭和27~31年の頃です。何と豊かで幸せであったことでしょう。ゆったりと時間が流れておりました。自然も美しい景色でした。今でも思い出します」

4 クリスマスの行事にまつわる思い出

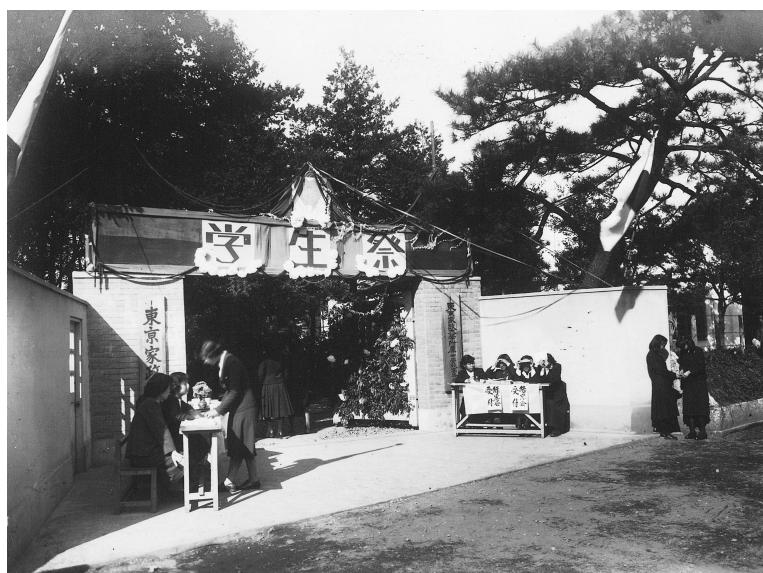
- ・昭和28年卒、N.Yさん「私達、被服科の学生有志が赤いネルの生地を用意して、青木学長の寸法を計らせていただいて、サンタクロースの衣裳作り。青木学長が着て下さった時の喜び。とてもとてもお似合いでした」
- ・昭和29年卒、F.Eさん「クリスマスには毎年手描きのお花の絵入りに愛あふれるお言葉入りのお葉書をいただいていた。愛情こもった恩恵の一つです」

5 卒業式にまつわる思い出

- ・昭和 28 年卒、N.Yさん「昭和 28 年 3 月は一期生の卒業式でした。卒業する学生はスーツ（黒か紺）を着ること、着物と袴はいけないということでした。被服科は手作りのスーツでした。宮下孝雄被服科長、山下俊郎児童科長、常吉勝栄栄養科長が各科の先頭に立たれて教室から卒業式場までパレード。その後短大も続きました。青木誠四郎学長は一番先頭でした。ガウンに角帽姿でした。祝いのお言葉をいただき一人一人に卒業証書を手渡して下さいました」
- ・昭和 28 年卒、Y.Yさん「卒業式のあとで学長主催の紅茶パーティーに招待されまして、生まれて初めて立食のパーティーを体験し、それがお別れとなり、本当に胸の熱くなる愛を感じ又母校の恩愛を持ち続けます事となりました。思い出深い先生との一刻です」
- ・昭和 32 年卒、A.Kさん「卒業の時いただいた若草色の一輪ざし、今も大切に使っています」

6 農村実習の思い出

- ・昭和 32 年卒、M.Rさん「農村実習も忘れられません。沼田に近い農村に入り、各農家や公民館や社務所等に寝泊まりして、農繁期の農家の仕事を手伝ったり、託児所を開いたりした事も、井戸から水を汲みあげてお風呂をたいたり、食事の準備をしたり、自分達の生活から離れた経験と共に、荷物や寝具の発送など全ての準備等を1人でするとい事も自立への良い体験でした」



「学生祭」 (昭和26年11月3日)

～ 上記写真、昭和28年大学卒（生活被服）Y. K様提供

B 短大

1 母の日にまつわる思い出

- ・昭和28年卒、F.Nさん「カーネーションとクリスマスカード。ずっととっておいたのですが……。一枚一枚手書きで。その頃に学長室を訪れるといつでも作業中でした」
- ・昭和28年卒、T.Mさん「母の日のカーネーションのカードを戴き、郷里の母に感謝の言葉を書き添えて送りました。母はそのハガキを小さな額に入れていつまでも飾ってありました」
- ・昭和29年卒、S.Rさん「母の日。学長先生より1人1人にカーネーションを頂きました。その折、私には母が死亡していたため、(昭和25年)白いカーネーションを頂きました。赤レンガの大部屋(8人)に帰って来て1人で涙したのをこの年になっても思い出します。『母の日の 白いカーネーション 大粒の涙 あふれさす 柳行李の思い出』 こんな歌を作っています」

2 クリスマスの行事にまつわる思い出

- ・昭和28年卒、F.Aさん「田舎者の私。はじめてのキャンプファイヤー(クリスマス之夜)。それはそれは楽しいものでした。事前にわら半紙の謄写版のクリスマスソングの歌詞が配られ、あかあかと燃える火のまわりを学生、先生方共に肩を組んで歌いおどり、忘れられない思い出です。それから讚美歌が大好きになりました」
- ・昭和29年卒、O.Mさん「クリスマスの時、司会をいたしました。大きな木を講堂の真ん中に立て、いろいろかざりつけ、皆さんがいろいろと(歌やおどりその他)、最後に先生がサンタクロースになって後ろの方から出てこられ、皆さんびっくりとよろこびで大変でした」
- ・昭和30年卒、Z.Tさん「クリスマスの時、角砂糖をいただきました。角砂糖は甘い。その心は、角があっても甘い。ママの小言」
- ・昭和30年卒、N.Iさん「クリスマスカードをいただき、そのお言葉メッセージに「全人類に愛を教えた下さったキリストの誕生日……」というような事が書かれていて、本当の愛とは?と考えたような記憶があります。勿論先生御自身の手がきのカードでした。今、思い返すと一番多感な青春時代に愛情・勤勉・聡明を御教えていただき、私の原点になっているように思います」
- ・昭和31年卒、S.Mさん「クリスマス会の時、講堂に入る時に渡されたカードで聖書が当たり、学長先生から、にこやかに“おめでとう”と云って渡されました。一番の当たりくじでした」

3 キャンプファイヤーの思い出

- ・昭和 28 年卒、N.E さん「キャンプファイヤーで、青木先生から進んで『花』を歌いましょう」と言われて、「春のうららの隅田川・・・」とみんなで合唱しました」
- ・昭和 30 年卒、T.S さん「学期末の頃と思いますが、夕暮れの頃キャンプファイヤーでその周りでフォークダンスをした記憶があり楽しい一時でした」
- ・昭和 30 年卒、Y.F さん「多勢で火を囲み青木先生から発した友情のサインと愛情のサインを送って感激したことをなつかしく思い出します。スクエアダンスに興じた楽しい1夜でした」
- ・昭和 32 年卒、N.K さん「夏休みに帰省する前は、愛情の火、勤勉の火、聡明の火と三つの火を灯しキャンプファイヤーし御馳走して下さり楽しい思い出です」

4 卒業式にまつわる思い出

- ・昭和 28 年卒、K.T さん「卒業の時、青木学長ご夫妻から茶話会にお招きを頂き、クラス全員、この愛情を身をもって実現された事に深い感銘をおぼえ大変嬉しゅうございました」
- ・昭和 28 年卒、K.M さん「卒業の日、あのまだ食糧不足の時に、サンドイッチを一人一人皿に、テーブルセットで祝って下さいました。今でも忘れられません。学長の自費だと思います」
- ・昭和 29 年卒、I.M さん「卒業式の日。大学祝典序曲に合わせ、先生を先頭に構内を行進した時のお姿は威厳に満ちあふれるものがありました」
- ・昭和 30 年卒、U.M さん「卒業式の時に、先生が1人1人にていねいに証書を手渡して下さいしたのは今でもうれしく、他の大学にはないことだろうと思っています。今はなき父も一緒に参列してくれたので、とてもよろこんでいたのを思い出します。式後のパーティで、入り口に先生ご夫妻が両わきに立たれて、あのせいじ色の小さな花びんを、1人1人に手渡して下さいました（今も毎日庭の草花を活けて楽しんでいます）」
- ・昭和 31 年卒、K.T さん「『風しげき 空に翼をはらんとす 幸あれかしと祈る心か』卒業にあたっての学長先生からのことばだったと思います」

5 学長の軽井沢別荘の思い出

- ・昭和 27 年卒、T.N さん「1951 年 5 月 21~23 日。先生の軽井沢の別荘を開放して下さいて級の皆さんと楽しませていただきました。助手の古宮先生の夜の怪談など怖かったけれど今ではとてもなつかしく思い出します。夜青木先生はどう過ごされていたのかしら？ 思い出せません」
- ・昭和 27 年卒、W.S さん「二年生の六月、私達全員（学生が少なかったの）を軽井沢の別荘につれて行って下さいました。田舎出身の私には別荘とは言葉を知るだけの夢のような現実でした。一緒にカレーライスを作り、夜は近くの温泉

と一緒に語り明かした一夜は今もはっきりと覚えており、この上もない幸せな日でした。この思い出への郷愁は、10年来続けている私達の主宰するファッションショーに生かしました」

6 その他の思い出から、特筆すべきもの（老稚園、校門の礎石づくり）

- ・昭和 28 年卒、匿名「老稚園。教授の先生方がエプロンを着て帽子（子供用）をかぶり肩カバンをして並んで壇上に入場し、助手の先生が先生となって園児たちとの楽しいやりとり。満場大喝采」
- ・昭和 28 年卒、匿名「十条駅からの通学路が出来ることになり、校門を作るに当たり、夏休みが終わって上京する際に、学生それぞれの土地から石を1つずつ持ってくるように、と。校門の礎石にしたいとのこと。埋め込まれたのが出来ました、今はないとのことです」
- ・昭和 31 年卒、M.Mさん「家政大学が胸に付けている「バッチ」の意味を教えられた時の感動は忘れられません。かがり火で行く道を照らし、盾で身を守り、鳩は平和の象徴と教えられました。敗戦国の日本にこれから希望を求めて出発、との思いがありました」



「クリスマスの宵」

～ 東京家政大学博物館より提供

設問9 「愛情溢れる学園づくりをどういう点で感じ取りましたか」

この問いは、先生との個人的関わりについての印象を超えて、教育体制や学生生活全般への学園の配慮などから、「愛情溢れる学園づくり」の印象を聞いているので、回答は難しかったと思います。個人的体験からゼミの様子、そして学園全体の雰囲気に至るまでさまざまな観点からの回答がありました。以下は、設問の趣旨に比較的該当すると思われる回答例です。

A 大 学

- 1 昭和30年卒、K.Rさん「清潔な身なり、ズボンの着用は許可をもらう事。女性としての身づくろいで講義を受ける。礼儀正しく学園を歩いていても対面して来る人には道をあけていました。在学生は新入生がホームシックにかからない様お世話をしていました」
- 2 昭和30年卒、K.Mさん「他の大学の事を友達から聞くたびに我が校は教授との距離が近いと、うれしかった」
- 3 昭和31年卒、T.Aさん「大学の児童科の指導教授は山下俊郎先生でした。山下先生は週に1度、お昼に会食の日を設けて下さいました。児童学研究室に学生達がお弁当を持って集まり、先生を囲んで会食し自由に質問やお話をしたり、先生の指揮の下にドイツ語で歌を合唱したりしました。本当に先生と学生の間が近く関係が濃かったと思います。このような事から私達児童科は学生同士も学年の垣根を越えて皆が親しくなり、良い関係を持つことができました。まさしく青木先生の生活信条「愛情・聡明・勤勉」の実践であったと思います」
- 4 昭和31年卒、F.Eさん「この世の楽園を目指していたなどとは思えません。学校を出て、どんな所でも明るい光になるようにと教えられたように思います」
- 5 昭和32年卒、W.Mさん「いつでも私達学生のそばにいらした様でした。学長先生の運転手、手塚さん？も私達と同年令。先生はいつも心やさしく接して下さいました。ニコニコ顔の怒った顔を見たことない先生でした。その中にいつも「あっそうか!!」と心に残ることばが私にはありました」
- 6 昭和33年卒、U.Kさん「学園全体が思いやりのある方々が多く、安心して生活していたと思います。青木先生のご指導の賜物でございます」
- 7 昭和33年卒、T.Sさん「青木先生は学生とよく一緒にいらっしゃいました。呼びとめて、いろいろお話も聞いて下さいました」
- 8 昭和35年卒、Y.Sさん「みどりの木々に囲まれた静かな学舎が好きでした。一年間の寮生活は地方からの方々のお国柄を知る事が出来たのしかったと思います。のんびりムードも思索するには向いていたのではと思います」
- 9 昭和35年卒、S.Yさん「晴天の日はよく学長先生が建物の前に出られ、学生が通ると笑顔で声をかけられたり握手されたりしてる光景をよく見かけました」

B 短大

- 1 昭和 27 年卒、U.Tさん「青木学長は勿論、どの教授方もお話をする時、一人ひとりに実に誠実な接し方をされ答えを導いて下さいました」
- 2 昭和 28 年卒、K.Cさん「水曜講演の全部を網羅するご指導を私共は実践するよう心がけ、学内は和気あいあいの場でした」
- 3 昭和 28 年卒、A.Yさん「田舎育ちの私は、不安いっぱい入学したのですが、学園の生活信条のように教授と学生が親しみ合い、和やかに日々生活を送る事が出来、幸運な学生生活でした。のちに姪と娘も家政大を卒業しました」
- 4 昭和 28 年卒、F.Aさん「むさし野の木立も深く・・・とクラス会の度に口ずさみたくなります。大好きな校歌です。青木先生のお心がすべて含まれていて、お友達同志一つ心になれたような気がいたします」
- 5 昭和 28 年卒、H.Mさん「学長室への学生の出入りもにこやかに迎えて下さったのを感じています」
- 6 昭和 29 年卒、K.Jさん「学校の徽章は「愛情・勤勉・聡明」を表したものと聞いておりました。私はその徽章をお裁縫の時の針山に 50 数年ずっとつけたままで、常にこの言葉を思い乍ら生きて来ました」
- 7 昭和 30 年卒、N.Tさん「何となく家族を思わせる、何か困った事があっても母校に相談出来ると思わせる何かがある様な気が致します」
- 8 昭和 31 年卒、S.Mさん「学長に呼ばれて学長室に行くと、壁に学生の写真が貼ってあって、不思議に思ったが、高橋敬三先生と学内を歩いていて学生を見ると、〇〇さんで〇〇県だろうと云いあてていたのは、大人数であっても一人ずつを大切に下さったのだと思います」
- 9 昭和 31 年卒、I.Aさん「学生全員だったと思いますが、草取りをしていた折りに青木先生が優しく愛情溢れる表情で歩いていらっしやった事」
- 10 昭和 32 年卒、H.Kさん「今でも時々思い出すことが一つあります。それは、学園の中は今と異なり、教室と教室が離れていてコンクリートの小路でつながっており、普通はまじめにその路を歩いて歩くところ忙しく急いでいる時は、近道してそのコンクリートの上を歩かずに斜めにつつきって歩くということが生徒の間にはよくありました。そのことを先生は、近道をしてはいけない、というような表現で指摘されました（注：イージーゴーイングの戒め）」
- 11 昭和 33 年卒、Y.Aさん「昭和 31 年、九州よりの一人旅。ホームシックに、ひたすら母を恋いました。そんな時、なんのために自分はここにいるのか悩み続けました。でも先生の言葉がひしひしと身に沁みて来ました。多くの人々の愛、それなくしては、今の自分はいなかっただろう。勤勉・聡明は己の力で育てていくものだと思います」

設問 10 「先生の愛情の教えがどのように人生で生かされましたか」

この極めて個人の人生に関わる設問に対して、各人各様の回答がありました。第2部のアンケート回答集をお読みいただき参考にして下さい。ここでは大学・短大の回答例を紹介します。

A 大学

- 1 昭和 28 年卒、U.Kさん「3つの生活信条が今でも心の拠り所となっています。高校の教師 40 年余りの中にいつも生徒指導の信条にしていました。家政大で学んだことに喜びと感謝の気持ちで一杯です」
- 2 昭和 29 年卒、H.Kさん「教師としても、母親としても妻としても決して立派なものではない自覚はありますが、自分に与えられた立場で精いっぱい生きて来ました。その根本は先生の教えて下さった「愛情」があったからだと思います」
- 3 昭和 30 年卒、O.Yさん「施設の児童指導員をしていた時の事、家族の縁のうすい子供達とお正月泊まり込みで一週間ほど一緒に過ごした時は先生のお言葉が胸にしみて思い出された日々でした」
- 4 昭和 31 年卒、N.Hさん「昭和 27 年入学という、戦後の何となく荒れた気持ちを引きずっていたものでした。それが家政大に入学してから、気持ちが落ちついてきたように思います。意識が特別あったようには思わないけれど「愛情」というものが心の底に芽生えてきたものと思います」
- 5 昭和 31 年卒、F.Eさん「私は三つの中で聡明を一番におきます。当時の女性に一般的に欠けていた部分だと思います。地に足をつけ、自分の頭で考えて自立して生きること、そして光になること。でも難しかったです」
- 6 昭和 31 年卒、T.Mさん「生活が清潔であること。質素であること。品性があること。流行にまどわされないこと。私は足りるを知る人になろうと常に心がけて来ました。これも先生の教えの賜物と思います」
- 7 昭和 32 年卒、A.Kさん「希望していた教師の道にふみ出す時、理想として、どの生徒も平等の目で見つめ個々のよいところを見つけて伸ばしていけるよう指導と努力したいとはりきって歩み出しました。よく「ひいきする」ということばを耳にします。教師の中にも「好きな子、ダメな子」と差をつける人もいました。思い返してみると私にとってみんな愛すべき生徒達でした。今思うと私自身の考えではなくて青木先生のお教えが深く心に根付いていたのですね」
- 8 昭和 33 年卒、T.Sさん「高校の教師生活 33 年間。青木学長のお言葉の数々。行きづまった時にはかならず思い出しておりました」
- 9 昭和 35 年卒、N.Yさん「①家庭生活の中で（子育て、親の介護）、②職業生活の中で（教育者として教え子を大切に育てられました）」

B 短大

- 1 昭和 27 年卒、M.Mさん「主人の生活を毎日手伝った 50 年間でした。それは愛情を基本としたものであったと思います。必要事項であったのでした。私にとって、愛情・勤勉・・・この二つは幸いに深く心に入りました。自分自身考えても肯定出来ますが、聡明さには少々自信がありません」
- 2 昭和 28 年卒、F.Nさん「先生の教え共々、家政大の卒業生は良き家庭人であれ、と。そして家政大で学んだ事は後年、家庭の主婦としてすべて日常の中で生きた学びであったと述懐しています」
- 3 昭和 28 年卒、K.Mさん「これから結婚されるでしょうが、「スタートはチャブ台一つより始めよ」というのが心に残ります」
- 4 昭和 29 年卒、S.Sさん「幸いにも高校教員となり、40 年間務めることができました。新任の折には生徒から教えられることが多々ありました。家庭の事情や親子関係など私の知らない世界がありました。その都度学長の著書、青年心理学を読み返し私の糧としておりました」
- 5 昭和 30 年卒、T.Rさん「育児中に先生の児童心理学の本をひもといてみました」
- 6 昭和 30 年卒、T.Mさん「我が道を行く、という強い生き方ではなく、その時々で私を必要とする人の為に柔軟に対応してきたこと。こういう生き方が抵抗なく出来たこと。家政大で培われたものだと思います」
- 7 昭和 31 年卒、S.Mさん「長年栄養士として勤務していた時も、後年学園事務職で勤務した時も、対象は人だったので、1 人ずつ大切にして相手の立場に立って接したことです。心理学や学習心理学が役に立ちました」
- 8 昭和 31 年卒、K.Tさん「短大卒業後、中学校の教員になりました。「愛情・勤勉・聡明」がいつも心に生活していました。家庭でも仕事でも、特に教師としての姿にと心がけしました（特に道德の授業に学長講話が生かされたと思います）」
- 9 昭和 31 年卒、H.Sさん「自分の人生は自分で、という先生のお教えを基本として生きてこれた事に感謝して現在を幸いに思っています」
- 10 昭和 32 年卒、W.Aさん「卒業後、栄養士として 34 年間。その後地域の民生児童員として 12 年間。そして心配ごと相談員としての役目をまさに学長の教えを守り、思いやりや愛情をもって事にあたってまいりました」
- 11 昭和 32 年卒、T.Mさん「青木先生を中心とする学園の女子教育の方針の素晴らしさに家政大のすばらしさ（良さ）に、社会に出て改めてしみじみと気づかされました。何と云う立派な学校であったんだろう、と。長いこと私は行政マンや教育の立場にいたりしました。常に愛情をもって懸命に何事も接することにしていました。何年かたって、あそこでの実習はよかったと学生間で評判であったときかされたり、学生指導評価もよかったようなので、このことは学生時代に受けた教えが無意識のうちに生かされていたことを感じます」

設問 11 「学生生活の思い出：楽しかったこと、悲しかったこと等」

大学、短大それぞれの「楽しかったこと」「嬉しかったこと」「つらかった事」「悲しかった事」に対する回答数の多い順は次の様でした。

	大 学	短 大
楽しかった事	回答数 19 1位(8)：寮でいろいろな地方の人達と友達になった 2位(2)：キャンプファイヤー その他(各1)：別荘訪問、クリスマスの催し、箱根の寮での宿泊旅行など	回答数 73 1位(30)：全国の友達と和気藹々と寮生活を共にした 2位(12)：箱根の寮の宿泊旅行 3位(6)：キャンプファイヤー 3位(6)：学生祭 5位(4)：楽しい思い出ばかり その他(2~1)：クリスマスの催し、別荘訪問など
嬉しかった事	回答数 9 1位(2)：寮で友達に恵まれた その他(各1)：キャンプファイヤー、卒業式で1人1人に証書の授与、和裁でほめられた、農村実習でオルガンをひき喜ばれた事など	回答数 16 1位(2)：寮生活で多くの友達 1位(2)：女子6大学バレーボール大会で2位 その他(各1)：母の日のカーネーション、卒業式の時の学長夫妻によるパーティー、別荘訪問、休講の時映画を観に行った、箱根の寮の宿泊旅行など
つらかった事	回答数 7 1位(4)：被服のお直し その他(各1)：農村実習など	回答数 36 1位(20)：寮の食事・暖房・消灯時間など寮生活関連 2位(6)：授業びっしり・洋裁・和裁の宿題に追われた 3位(3)：被服のお直し その他(各1)：通学時間、暑くて寒い教室など
悲しかった事	回答数 7 1位(7)：青木先生の逝去・学園葬	回答数 24 1位(21)：青木先生の逝去・学園葬 その他(各1)：ホームシック等

「楽しかったこと」は大学・短大共に圧倒的に寮生活の友情が筆頭になっています。「うれしかったこと」も大学・短大ともに寮生活の友情関係が1位。ただし、寮の人間関係ではなく食事・暖房・消灯時間などについては「つらかったこと」も多く、短大では断トツの一位になっています。恐らくこのつらさも共に体験したことが寮の友情を更に深めたのではないのでしょうか。以下、回答例を紹介。

* 「楽しかったこと」

A 大学

- 1 昭和28年卒、匿名「楽しく、嬉しかった事は沢山ありましたが、青木先生の軽井沢星の温泉にある別荘にクラスの人達全員〈数人は都合でいきませんでした〉が招待され一泊させていただき、皆で先生のお宅を占領し、料理したりコーラスしたり、花火、星の観察したり、一晚御一緒させて頂いた事。本当に楽しい思い出として残っています」
- 2 昭和28年卒、U.Kさん「楽しかったことしか思い出せません。クラスの皆さん、気持ちよく接して下さったこと。寮生活で上級生・下級生の方々が姉妹のように付き合っただけのこと」
- 3 昭和28年卒、N.Yさん「青木先生にサンタクロースの衣裳を友人と手作りして着ていただき、クリスマス会ができた事」
- 4 昭和30年卒、I.Tさん「組でも寮でも皆仲よしで楽しかったです」
- 5 昭和30年卒、N.Yさん「あの頃は、若さもあり、希望に燃えております時でしたので、楽しいことばかりが思い出されます」

B 短大

- 1 昭和27年卒、U.Tさん「当時生徒数が少なかったので被服科一同、学校行事として軽井沢の学長の別荘へ泊りがけで参りました。美しい浅間山を見たり碓氷峠や方々出かけた事。お風呂は近くの星野温泉迄、真っ暗な夜道をこわくてキャーキャー言いながら歩いた事。学長の好物は肉じゃがだそうです。楽しかったです」
- 2 昭和28年卒、匿名「箱根の寮での共同生活は楽しかった」
- 3 昭和28年卒、A.Yさん「全国から集まった友達と毎日学習出来ることが何より楽しく嬉しい事でした」
- 4 昭和30年卒、U.Mさん「学生祭の時、自分の作ったドレスを着て、ファッションショーに出たこと」
- 5 昭和32年卒、J.Yさん「コーラス部を作って合宿、コンクールに出た事」
- 6 昭和33年卒、O.Nさん「短大の2年間の学生生活ですが、実習など次々にあり、中身の濃い2年間でした。もののない時代の寮生活、先輩・後輩の関係も余りなく現在も仲よく続いています。先生方もみんなやさしかったです。うれしい、楽しかったことはいっぱいあっても、辛いこと、悲しいことは覚えてないです」

* 「嬉しかったこと」

A 大学

- 1 昭和 28 年卒、Y.Y さん「被服の実技で出来そうもない、と泣く思いで仕上げた和服と帯が仕上がって松井先生に良く頑張ったとお声をかけて頂いた時でした」
- 2 昭和 30 年卒、I.T さん「学友会会長・寮長の役についていた或る日曜の昼下がり、全学連を名乗る男性の方々数名の訪問を受け、用件は加入要請と配布物の依頼とカンパでしたが、個人が主旨に賛成して同調することは別として組織では考えられないからお断りし、何かメリットがありますか？と伺ったら、「学校側への交渉なども皆の力でします」と返答がありました。「だけどそれはおかしいのではないですか？ 内輪のことは事情が分かっている内々の人同士がきちんとすべきでしょう。私の学校ではお願いするとききちんと聞いて、叶えていただけますよ！」と言ったら「ここは幸せなんですね。それを会で分けて下さいよ」と言いつつ、駄目ですかーと帰って行かれました。が私としては自分1人の判断で対処して果たして良かったのかナ？と悩みました、が翌日学生課長の高橋先生と三木先生に呼ばれ「貴女の対応は良識的で正しかったよ」との評価をいただき嬉しく思いました」
- 3 昭和 33 年卒、T.H さん「農村実習では保育係。幼児の輪の真ん中でオルガンを弾き皆に喜ばれました。人の役に立つことが出来て大変嬉しかったです」

B 短大

- 1 昭和 27 年卒、W.S さん「終戦以来迷い続けた「これからの世の中はどうか。自由主義とはどのように考えることなのか、学長先生は手を引くように優しく話して下さい、「これぞ」と思ったことでした」
- 2 昭和 27 年卒、U.T さん「軽井沢（青木先生の別荘）へ暑中御見舞いをお出しすると、几帳面にすぐお返事を下さり、文面と共に野の花の水彩画を描いて下さり嬉しくて今でもとってあります」
- 3 昭和 29 年卒、S.S さん「長い年月が過ぎると、すべて浄化され、何もかもただただ懐かしさのみですが、記憶にある嬉しかったことは、卒業式の時、式が始まる前に両親を含む学長招待のティー・パーティがありました。父も初めて学校へ来て、大変嬉しそうでした。その事が何よりの親孝行だったかなと思います。学長の細かい心遣いに感謝しました」
- 4 昭和 30 年卒、S.C さん「製作物が出来上がるのはとても嬉しかったと思います。苦勞が実ったからだと感じています」

* 「つらかったこと」

A 大学

- 1 昭和28年卒、N.Yさん「正門が現在の位置に開かれた時、「土台に嵌めて飾るので郷土の石を持参するように」と青木学長のアイディアでしたが、集まった石が少なくて間隔をとって入れて下さった事。もっと沢山、石が集められなかった、と」
- 2 昭和30年卒、K.Rさん「和裁の「おなおし」(1mm、2mmのきせのお直し)。今ではこの「おなおし」でがんばりの底力があります」
- 3 昭和31年卒、M.Sさん「栄養科でも必修課目として被服がありました。単衣の着物(浴衣)を製作しました。家に持ち帰る事は厳禁で教室での仕上げです。少しでも違った縫い方ですと“お直し”で同じ所を正しく縫えるまでお直しが続きます。私は3回もお直しが続き、教室に残って仕上げた事がありました。後日、全員で浴衣を着て記念撮影をしました。笑顔で写っている自分を見ると、つらかったけれど辛抱して良かったと思えました。(物事を習得する厳しさは大事な事です)」

B 短大

- 1 昭和27年卒、T.Nさん「(楽しかった事や嬉しかった事は沢山ありますが、新しい生活で寮生活の不自由さがこたえました)①風呂がなくて隣室の新入生と二人ではじめて銭湯という所へ行った事。②13人の大部屋で布団を敷く時には各人の机を壁際へ移動しなくてはならなかった事。③はじめての夜半にねずみが宙を飛び回って怖かった事。朝見たら私の柳行李の隅がかじられて母がいれてくれた煎豆がこぼれていました。④板張りのトイレが13人に1つしかなかった事。⑤冬の暖房は大きな部屋に火鉢一つで寒がりの私には辛いことでした」
- 2 昭和29年卒、K.Uさん「寮生活で朝食で納豆が多く出たこと。どうしてもきらいで・・・ふりかけですませる事多かった。ヒル食は食パン2切・・・寮の火鉢で焼いたこともあります」
- 3 昭和29年卒、Y.Sさん「試験の時の消燈で、前の水道局の外燈で勉強しました」
- 4 昭和29年卒、N.Yさん「寮の生活で消灯があって、毎日お部屋の前の廊下へ机を出して懐中電灯のあかりで作品を作ったりして、和裁、刺繍に繊維1、2本に針を動かすのでとても目が疲れたものでした。いい作品を作ろうと頑張りました」
- 5 昭和33年卒、S.Kさん「つらかったことは朝ねぼうが出来なかったこと。ハチャトリアンの剣の舞の曲で起こされてつらかったです。だけどこの様な経験をさせてくれた親に感謝です」

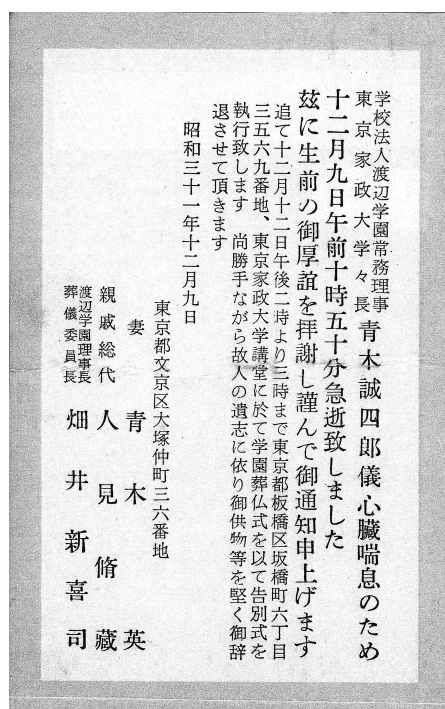
* 「悲しかったこと」

A 大学

- 1 昭和 32 年卒、A.Kさん「つらく悲しかったことは、青木学長先生との突然のお別れです。あの日校門の前で友人がかけよって来て知らされました。今日は全て休講とのこと。でもとても帰る気持ちになれず和裁教室に行きました。どんなことを話し、何をしたのか。遠く過ぎ去ったかなしい朝でした
- 2 昭和 35 年卒、M.Mさん「先生のお亡くなりになった後は、寮で一年生の私達には知らないことを先輩の方々からお聞きし、皆んなで涙を流しました」

B 短大

- 1 昭和 29 年卒、N.Hさん「当時の舎監室の並び？少し低い部屋に 10 人近く枕を並べて夜、月光を眺めてホームシックになり、しのび泣き。その連鎖反応でしくしくの伝染（コーラス）」
- 2 昭和 32 年卒、K.Jさん「学長とのお別れが一番悲しかった事でした。校門に並びお見送りしたこと、昨日の事のように思い出します」
- 3 昭和 33 年卒、N.Jさん「青木誠四郎先生の学園葬に〈その時クラス委員でしたので〉クラスのもう一人の方と参列し悲しくて泣きました。皆、泣いていました」



「青木先生の告別式通知」

～ 上記通知、昭和 31 年短大卒（被服 C）I. C 様提供

設問 12 「他の先生の思い出」

青木先生以外の先生方との懐かしい思い出に関する回答数は学短併せて 229。
回答数の多い先生の順番は以下の通り（敬称は略します）。

1位：三木テイ（26） 2位：山下俊郎（25） 3位：松井和哥（14）
4位：宮下孝雄（11） 5位：村上ハルヨ（10） 5位：木曾山かね（10）
7位：宇留野勝正（8） 8位：長谷川秀子（6） 9位：生田光子（5）
9位：丸岩ツヤ（5） 9位：大島はまこ（5） 9位：東昇（5）
13位：青木みん（4） 13位：藤本やす（4） 13位：小笠原八十吉（4）

ほかに 48 人の先生方。

以下、三木テイ先生から宇留野先生までの回答例を紹介します。他の教員も含め、エピソード豊かな思い出は第2部のアンケート集で確認してください。

1 三木テイ先生

- ・昭和 29 年大学卒、Y.Y さん「三木先生のお講義：「家庭とは労働力の再生産の場である」。このフレーズが理解出来たのは職を引いて主婦になってからでした。自分なりに模索し続けた忘れられない一言でした」
- ・昭和 31 年短大卒、K.R さん「三木テイ先生。この方には家政学を学びました。声を体の底から発せられ熱心に講義されました。学園内で又寮内で、女性らしく生きて行く事を説かれました。母親のような存在でした」

2 山下俊郎先生

- ・昭和 31 年大学卒、U.F さん「担任の山下先生は講義に入る前に必ず、シューベルトの「野ばら」をドイツ語で歌うことを教えて下さり、皆で歌ってから授業に入りました。授業もなごやかで良かったです」
- ・昭和 33 年短大卒、U.K さん「山下俊郎先生の心のもちよう、人の考え方、ひらめき、展開はこういうものだなあと思いました」

3 松井和哥先生

- ・昭和 32 年大学卒、A.K さん「和裁の指導はきびしく何度もお直しをくり返し、「そう、きれいにできました。よろしいでしょう」とおっしゃったあと必ずよく努力しましたねとほめてくださいました。私も生徒達をほめることは忘れず実践してきたつもりです。和裁の教材は全て母の衣類の仕立て直しでした。訪問着だったか帯だったか、ある日皆さん集まってください、と先生が私のところに皆を呼んで「これがほんとうの昔の金糸です」と示してくださったのです。いつも古いものばかり縫っていた私に対しての心づかいだったかと思えます」
- ・昭和 32 年短大卒、K.A さん「松井先生。女性の鑑のような気品のある美人で、私もそうゆう大人になりたいとあこがれておりました」

4 宮下孝雄先生

- ・昭和 32 年大学卒、W.M さん「宮下孝雄先生はデザイン・色は大体 20 年を周期として巡る。今でも合点!! と思う事があります。又国会の議場の天皇陛下の坐する椅子のデザインをなさった・・・とか。いろいろお話を伺いました。」
- ・昭和 27 年短大卒、U.T さん「色彩学の宮下教授。白衣をいつもお召しでゆっくりした話し方で本当に授業が楽しくて仕方がないといった口調で話され私達も楽しかったです」

5 村上ハルヨ先生

- ・昭和 35 年大学卒、I.K さん「アダ名で申し訳ございません。村上先生＝ベシャメル（ホワイトソースが実技試験）」
- ・昭和 28 年短大卒、K.C さん「担任の村上先生の調理実習は素材を大事に廃棄物を少なく合理的な有難い御指導を受け今日でも実践しています」

6 木曾山かね先生

- ・昭和 32 年大学卒、K.M さん「木曾山先生に、貴女は芸術家ではなく芸術やよ、と云われた事」
- ・昭和 28 年短大卒、A.Y さん「木曾山かね先生が担任でした。大変きびしい先生でしたが、愛と忍耐と努力について学びました。私が先生からいただいたお言葉は「愛と真実の人となれ」でした」

7 宇留野勝正先生

- ・昭和 30 年大学卒、K.R さん「宇留野先生の講義で赤ちゃんには母乳が大切です、オッパイをのませなさいと赤ちゃんが泣いてもオッパイと云った様にオッパイ、オッパイと云われ、学生は何となくはずかしい気持ちでした。その後先生にお目にかかった折、今はミルクだよと云われました。いつもニコニコとしたお顔の講義でした」
- ・昭和 32 年短大卒、N.Y さん「育児学の宇留野先生の授業は、とても解りやすくアクセントがとても楽しく、お陰様で子育ての際は頭に入っていましたのですぐ役に立ちました」

注：私が大学に奉職した頃、三木先生を筆頭に名前の挙がった上記の先生方の多くが在職されていました。先輩の馬場喜敬先生（哲学）に伴って、時々、微生物研究室の神野節子先生を訪問したことを懐かしく思い出します。今回のアンケートを機会に先生に青木学長時代についてお尋ねしたところ、平成 5 年の後援会報に掲載されたご自身の回答文の写しを送っていただきました。その中で特に印象強かったエピソードがあります。昭和 24 年に大学に赴任した 1 年間、給与が低く下宿生活もままならいたため辞めるつもりで上司に相談したところ、「縁があってここに来たのだから、多分学校はつぶれると思うので運命を共にしよう」と学長が言われているとのこと。独り逃げ出すのも、と思いつめたとのことでした。大学開設の 24 年度は、「僕は学校の葬儀委員長になるつもりであった」と不退転の覚悟で学園運営に臨まれていたようです。愛情溢れる学園づくりの夢を学生・教職員と分かち合わずに閉校できない、との強い思いが学校存続につながったのではないのでしょうか。

設問 13 「これからの大学・短大に期待すること」

卒業生がこれからの大学・短大に何を望むか、期待するか。さまざまですが、以下、回答例を紹介します。詳細は第2部の回答集をご覧ください。

A 大学

- 1 昭和 28 年卒、匿名「私共の時代と異なり、今は色々なものがありますが、折角の勉強の時間なのに他の方に目が向けやすい、もったいないと思う。先にいって後悔しない様に努力してほしい」
- 2 昭和 29 年卒、H.Kさん「どんなに大学が大きく社会的にも有名になっても、他の大学にはない暖かい絆でみんなが結ばれているという特色があることを忘れないでいたい」
- 3 昭和 30 年卒、I.Tさん「以前あった学科に比べ、現代にマッチさせた学科も増設され、発展している事は嬉しいことですが、中で学ぶ学生は勤勉で明るく伸びのびと何事にも前向きな研究心を持つよう指導力を持ってほしい。技術指導については、現代風に省力、合理化も大切でしょうが、根本をしっかりと把握した上で常にリーダーを指導出来る実力者養成校であって欲しい」
- 4 昭和 31 年卒、M.Sさん「世の中、色々な事件が起こります(家庭内や社会においても)。私は人の資質の問題もあろうかと思っています。10 代の後半から 20 代の前半、つまり大学生生活の時期、青木先生がよく言われていたように人間形成の一番大切な時期(青年心理学を受講しました)であると。この時期表面は地味でも濃密な知識と知恵を生み出すような勉学を授けて下さいます様、要望いたします」
- 5 昭和 32 年卒、A.Kさん「卒後 50 年の会に出席させていただき、元気で明るくはなやかな学生達に会いました。50 余年前、理想の学園を築こうと努力なされた青木学長先生のこと語りつないでほしいと思います。」
- 6 昭和 32 年卒、S.Yさん「人を育てる：愛情深く勤勉で聡明な人がらと、専門の高い実力を備えた人物を社会に送り出すことに、より一層力を注いで下さい」
- 7 昭和 33 年卒、S.Mさん「家庭科教育をしっかりと守ってほしいと思います。教員生活をしていて、毎年家庭科の時間数が少なくなっていくのがくやしくて、私は校長に何と云われようと私は自分が務めているうちはへらしませんとがんばりました」
- 8 昭和 33 年卒、I.Mさん「大学の特色がどこにあるのか、よく分らなくなってきました。伝統と歴史をふまえ、もう一度、大学の特色を明らかにしてほしい」

B 短大

- 1 昭和 28 年卒、M.Mさん「教職を希望する人には、技術面はもとより、知識、特に人間性(思いやり)を希望します」
- 2 昭和 28 年卒、O.Mさん「世の中はまだまだ男性社会です。女性の聡明さで、この生き苦しい社会を変える、変えられるよう、女性の自立を希望したい」

- 3 昭和 28 年卒、K.I さん「先生と生徒の関係が濃密な学園。それには、あまり規模大きな大学で、多くの学科、多くの生徒はどうかと思います。経営の点では、問題あることでしょうか。夏休みに生徒が手紙を出せば、すぐに先生からもご返事のある関係。若い私はどんなにか、教えられたことか」
- 4 昭和 29 年卒、T.S さん「家政学を職能化して行く女性向上の大学であって欲しい（家族管理に秀でる女性）」
- 5 昭和 29 年卒、Y.S さん「各分野で卒業生はご活躍していることと思いますが、家政大学の卒業生からもNHKの今日の料理などの番組に出て指導して下さる方が出ても良いのではないかと期待しております」
- 6 昭和 30 年卒、I.S さん「他の学校にみられない、生活信条「愛情・聡明・勤勉」を永久に忘れることなく、いかなる道を選んだとしても人間形成に役立ててほしいと強く思います」
- 7 昭和 31 年卒、K.U さん「教授と学生が教室内で、ただ単に学問を教え、学ぶという関係だけでなく、一歩ふみこんだ精神力を養う場所だと言う事を肌理の細かい指導を呈して頂き度いと思います。教育を掘り下げた実践哲学、実践理性を切望致します」
- 8 昭和 31 年卒、K.R さん「女性の自立をめざされた学園として、先見の明があったと思いい、頭が下がる思いです。この精神を後々まで貫いてほしいと思います」
- 9 昭和 31 年卒、N.S さん「青木学長先生の信条を継続して活躍していただきたいと考えます。日本のいたるところで卒業生の先輩が学校をつくり、伝統がつながっているように思います」
- 10 昭和 32 年卒、K.K さん「～前略～私はかつて北欧とイギリスを訪問したことがありました。そこで婦人の生涯学習教育施設デンマン・カレッジで文化交流や意見交換をした時のことです。「女性が勉強することは国の繁栄につながります。女性が賢くなれば家庭経営や育児を通じて夫や子供に影響を与え、さらに次の世代の子供にも伝承されるから」とおっしゃった館長さんの一言が今も強く印象に残っています。女性が家政学を学ぶことの大切さと、家政大学の繁栄と発展を心から願っています」
- 11 昭和 32 年卒、T.E さん「人生の中のほんの一瞬のような貴重な学生時代を軽率な行為に流される事なく、自分を大切に出来る芯のしっかりした人間教育をお願いしたいと思います。青木学長の意志をそのままにしたい。自由をはき違える事なく」
- 12 昭和 33 年卒、K.K さん「女子大一位をめざして下さい」
- 13 昭和 33 年卒、T.A さん「(別紙より) (先生が逝去された直後から) 先輩達の間から在校中に、「青木講堂」を建てたいとの話が出ていたのに、何年か後に家政大に行ったら、青木学長の影が全くないのがっかりしました。今回この様に青木学長を蘇らせていただいで心からうれしく懐かしく思っています」

設問 14 「大学・短大の学生達に最も伝えたいこと、最も望むこと」

この設問では、現在或は将来、大学・短大で学ぶ学生達へ、卒業生としてぜひとも伝えたいこと、望むこと等を答えていただいています。以下、回答例です。

A 大学

- 1 昭和 28 年卒、N.Yさん「長期・短期の目標をたて、そのためにはどのような学生生活を過ごしたらよいか考える。「友達は宝」です。よい友達になるようにお互いに成長しましょう。1 + 1 = 2ではなく、3にも4にもなり、一生涯励まし合って育成されます」
- 2 昭和 28 年卒、Y.Kさん「青木学長の「愛情」の教えをもとに、「自分にきびしく、人に寛大に」の心を持っていただきたいと思います」
- 3 昭和 29 年卒、Y.Yさん「自由で多感な時、思い切り新しい知識を求めて技術や資格を取りながら広く考えと想いを深める事で一生の道を見極めて頂きたいと、恩愛ある校風を受け止めて下さい」
- 4 昭和 31 年卒、U.Fさん「青木先生の「生活信条」は、どんな時代になっても変わらないと思います。学生時代に学んだことは私達のような年齢になっても役立っております。良い体験もしてください」
- 5 昭和 32 年卒、W.Mさん「自分を生かしながら、人の役に立つ人間になってほしい。本学の精神「愛情・勤勉・聡明」を根づかせてほしい。現在の学生は本当に「苦労」「忍耐」を知らぬ人が多い。人間耐えて花を咲かす「梅」のようであってほしいと思う。そしてよくなかった過去をふり返らない!! それを土台に上昇を見なければと常に思う!! そんな人であってほしい」
- 6 昭和 33 年卒、I.Yさん「外国の人々と交わりの有る機会を作り国際的な学生生活をしていただきたいと思います」
- 7 昭和 33 年卒、I.Mさん「①将来の自分の生き方をきちんと設定し、目的意識を持って学習する。②情報化の中での活字離れが進行していますが、やはりキメ細かい学習には読書が大切だと思う。読書し、内容要約する学力を持ってほしい。③豊かな人間関係を保持しながら、自律した女性を目ざしてほしい」
- 8 昭和 35 年卒、N.Yさん「じっくり勉強し実力をつけて卒業して下さい。教職についておりましたが、家政大卒業生はみな実力がありましたよ。それに忍耐力も」

B 短大

- 1 昭和 27 年卒、W.Sさん「生命を大切に精一杯生きていただきたいと思います」
- 2 昭和 28 年卒、K.Mさん「50 年前、青木学長という、青年心理学を教えられ実践なされたご立派な方が居られたことを伝えます」
- 3 昭和 29 年卒、N.Aさん「私たちは、アルバイトは禁止でしたが、仕送りのお金を感謝し、今の立場を幸せと感じてほしい。同じ学問を追求しているお友達といっぱい話をする。学生の本分は何か。常に自戒してすごす。人生は長いけど、この幸せはそう何年も続かないのだ」

- 4 昭和 30 年卒、U.Mさん「学業に専念するのはもちろんですが、人間としても他人に対するやさしさ、ありがとうが云える人に育ってほしい」
- 5 昭和 31 年卒、K.Rさん「愛情・勤勉・聡明。この言葉は年齢を重ねていくうちに理解出来るようになると思います。心のささえとして一生の宝物です。恵まれた環境の中で学園生活が出来た事を誇りに思ってください」
- 6 昭和 31 年卒、K.Tさん「望んでも思うように勉強できなかった戦中戦後の教育からすると、今の学生は幸せな時代にめぐりあえたのです。青春を楽しんでしっかり勉強してください」
- 7 昭和 31 年卒、F.Tさん「すなおな事は大切。しかし理論的に反論できる人になってほしい。言い負かされることのないように。特に外国に行った時は生活面でも主張できるように」
- 8 昭和 32 年卒、T.Mさん「学生時代ガムシヤラに勉強することの大切さ。このことがゆたかな人間性の醸成につながるから」
- 9 昭和 33 年卒、H.Cさん「家政大・短大の卒業生であったことに、卒業して 50 年以上たった今も誇りに思っています。その誇りをけがさぬように一生懸命、生きてきました。人の心の奥にひそむ心にも、思いやりの心が向けられるような人になってネ」
- 10 昭和 33 年卒、S.Yさん「開校時の精神にかなうような人間作り、人になってもらいたい」
- 11 昭和 33 年卒、K.Hさん「目標をもって入学した以上、勉学にいそしみ、又若い時代にしか経験出来ないこと、精神面の向上を望みたい。将来の目標に向かって、日本の国のためにも」

設問 15 「先生にお会いできるとしたらお伝えしたいこと」

各学生が心の中で、先生のイメージに向かって、個人的に先生にお伝えしたいことを、あたかも対話しているかのように切々と吐露しています。以下、いくつかの回答例を紹介しますが、全員については第2部の回答集をお読みください。

A 大 学

- 1 昭和 28 年卒、U.Kさん「(本学に編入する前は師範学校にて青木先生の児童心理・青年心理を学んでおり、先生から直接教をいただきたく編入した経緯がある) 先生がいらっしゃらなかつたら家政大で学ぶことができなかつたと思います。有りがとうございました」
- 2 昭和 28 年卒、H.Sさん「水曜講演で一言ひとことていねいに指導をいただきましたこと、一生心の糧として生きていることをお伝えしお礼を申し上げたい」
- 3 昭和 30 年卒、K.Rさん「感謝の気持ちをお伝えしたいです。私は 77 才になっています。「愛情・勤勉・聡明」を折々につぶやきながら生きて参りましたが、まだまだ修練中です。頑張ります」

- 4 昭和 30 年卒、N.Y さん「青木先生とのめぐり逢いは、私の人生の一番の大きな宝でございました。有難うございます」
- 5 昭和 31 年卒、T.A さん「先生とお別れしてから今日まで、我々の社会は人々の努力によって著しく発展し、生活の便利さ豊かさを享受することが出来るようになりましたが、その反面拝金主義と物質優先主義に傾き、精神面の充実度はむしろ低下し道徳心の欠如などに悩まされるようになってしまいました。今こそ先生のお教えを学び直し、世の中に実現するよう努力が必要と思われます。私も年をとり残り少ない人生となりましたが、最後まで先生の教えを忘れず、子供や孫にも教示できる生き方をしたいと思ひます、とお伝えしたいです」
- 6 昭和 31 年卒、F.E さん「青木先生は私が卒業した年の 12 月に亡くなられました。校門の外に並んでお見送りしました。卒業式のころ、お元気だったのにすごく寂しく思ひました。戦後やっと立ちなおし始めた頃でしたが、今の世の中先生はどう思われるのかおききしたいです。いろいろ女性の生活はらくになりましたが、なんだかあの頃のほうが、活気もあり一生けんめい勉強しましたし、真面目でまっすぐだったと思ひます。先生とお会いし、御一緒にすごしたことはきっと私の中で生きているのだと思ひます。ただ具体的にはいい表せません」
- 7 昭和 32 年卒、F.E さん「先生のおやさしさ! もう一度お会いできたら、青年心理学の講義をしていただきたい」
- 8 昭和 32 年卒、O.N さん「ありがとうございます。大きく道をふみ外さず人生を終えられそうです」
- 9 昭和 32 年卒、T.K さん「水曜講演は毎回出席しました。私にとって栄養剤であり、倫理を論されたと思ひています。恵まれた学生生活でした」
- 10 昭和 32 年卒、S.Y さん「先生のお話を伺いお人柄の一端にもふれることが出来たのは得がたいことでした。愛情・聡明・勤勉に感銘をうけて私の身内からは 3 名が家政大に進学いたしました。ありがとうございます。先生が亡くなられたあと御自宅の書斎の整理に 2 人 1 組で伺いました。私共はノート類の整理（そろえて収納）をお手伝いしましたが、大変な勉強家であられたのだと感じました」
- 11 昭和 35 年卒、Y.S さん「先生からのカーネーションカードから、しみじみと先生の暖かさが今も伝わって来る思ひです。先生の全人格をもっと知るチャンスが欲しかったと思ひます」
- 12 昭和 35 年卒、Y.K さん「(31 年 12 月のクリスマス会で幸運の No.1 に選ばれ学長のプレゼントであるタータンチェックのマフラーをいただいた) マフラーまだ使用しています」

B 短 大

- 1 昭和 27 年卒、W.S さん「先生、お教え通り精一杯生きましたよ、と申し上げたい。きっと、よくやった、と言って下さるでしょう。今もかぎりなくお慕い申している学長先生です」

- 2 昭和 27 年卒、U.T さん「青木学長の生活信条は皆が受け継ぎ花開いています。社会で御活躍の方も大勢いらっしゃいます。今回学長について考えるチャンスをいただき学長からこんなにいっぱいすばらしい思い出をいただいていたのかとびっくりしました。心からの感謝を申し上げます。有難うございました」
- 3 昭和 28 年卒、K.I さん「若い多感な時代に、対人関係で人への接し方、他を愛すことのありようを、お教え下さり、そのこと私の心に染み込み、その後の私の人生の歩み方となりましたこと、ありがとうございます。ただ、私には先生への感謝の思いのみであります、と御礼を申し上げます」
- 4 昭和 29 年卒、H.Y さん「小・中・高で、子ども生徒が好きという教師に出会えませんでした。青木先生の講義で新しい世界が開けた思いです」
- 5 昭和 29 年卒、N.A さん「先生、いっぱい、ありがとうございます。人生 100 年の長さのたった 2 年でしたが、先生のお話が私の生きてきたバイブルの如く宝を授かったのです。人権を尊重してくれる夫にも出会い、只今も元気です」
- 6 昭和 29 年卒、K.M さん「すべてをつつみこんだ教育者らしからぬ最高のほほえみに、又であいたいです」
- 7 昭和 29 年卒、M.K さん「女の為に女性もがんばりました。日本も今に女の首相が出来るかも知れません、と」
- 8 昭和 29 年卒、K.Y さん「先生にお会い出来、指導受けた事はうれしい感謝です。卒業して田舎に帰った折、青木先生の青年心理学、教育心理学の本が本屋さんになり、うれしかったです」
- 9 昭和 30 年卒、Z.T さん「兎に角一生懸命生きて来ました。先生の教えが身にしみています。青木先生の青年心理学。小さい時にきちっと人生の基本的なしつけをする。食事には気をつけて丈夫な体を作ってやる。男児 4 人育てましたが、自立して生活しています。子育ては親の責任。自信をもって子育てをしました」
- 10 昭和 30 年卒、U.M さん「卒業式の後、一人一人に手渡された小さい花びん（20 cm 位のせいじ色の一輪挿し）、今も大切に、毎日、洗面所の近くの棚に我が家の庭の花（今は、つばき）を活けています」
- 11 昭和 31 年卒、O.A さん「学園を散歩される笑顔に接し、今の自分を見て欲しいと思います」
- 12 昭和 31 年卒、K.R さん「心理学と云う勉強を通して人々の心を豊かにし世の中が安穏になるよう、愛情に満ちた世界をこの学園から広めたいと考えておられたのかな。今は有難うございました、とお礼を申し上げたい」
- 13 昭和 31 年卒、F.T さん「何時までも心の親でいて下さい」
- 14 昭和 32 年卒、M.S さん「講演のすべてが心に残ります。私の人生における道を教わった感じです。もう一度お話を聞きたいです。ありがとうございます」

- 15 昭和32年卒、N.Hさん「(以下、別紙の文章) 青木学長の作詞の寮歌は私達が2年生の時に出来たものでした。その少し前、先生の体調は余りよろしくなかったのでしょうか、白菊寮の入口に先生が腰をおろしていらっしてお話しをした記憶があります。その時の青白い顔がいつ迄も頭を離れませんでした。その寮歌「ゆかしき花の名にちなみ・・・」今は寮も1号館、2号館と呼ばれる様になっているとの事。少し寂しい思いました。母校家政大の発展をお祈りします」
- 16 昭和33年卒、M.Kさん「青木先生の講義は青年心理学でした、が、ほんのわずかな期間でしたのもっともっと学びたかった。青木先生にお会い出来、愛情、勤勉の精神を子供に植えつける事ができ、子供達もすなおに育ち、今は幸せな老後を送っています」

第1部の要約

「一粒の麦死なずんば」という聖書の一節がありますが、大学・短大創成期に学長になられた青木先生は、それに先立つ文部省時代に洞察した民主主義社会の根本原理である「愛情」という種子を、生活信条の教えにのせて、一人ひとりの学生の心の中に撒き、この学園を愛情咲き誇るこの世の楽園に育てようと意図されておられました。仔細は第3部で解説しますが、私自身そのように理解しています。

アンケートの設問2「入学でたんへんだったこと」と設問3「本学を選んだ理由」の回答から、戦後の窮乏を極めた混乱のなかで、親の支援もあり、期待と不安を抱きながら、遠く故郷から離れて都会での学生生活をスタートさせた学生が多かったことがうかがわれます。設問4「入学のときの希望と夢」の回答では、教職や家政技術に関わる資格修得を目指していた学生が圧倒的な多数を占めていますが、明らかに個人尊重と男女平等の憲法に精神に触発されて、男性と肩を並べて個人として自立した職業人・社会人になりたい、という強い願望を抱いていたと推測されます。

そのような学生たちの多くは、入学式の訓示やその後の水曜講演で、自立や自律の大切さを繰り返し青木先生から諭されて、わが意を得たりという気持であったと思いますが、それに加え、個と個が「いたわり」や「思いやり」によって共同体を形成する、という全く新しい愛情論に触れ、新鮮な驚きを体験したに違いありません。設問5「入学式の訓示の内容」からうかがい知られるように、新入生は入学式で生活信条の最初の洗礼を受け、その後の水曜講演では、生活信条を基軸に学生としてのあり方、学生生活のあるべき姿について諄々と説く先生の教えに耳を傾けました。設問6「感銘受けた水曜講演」の回答にその一端が表れています。

他の設問の回答の詳細は、第2部のアンケート回答集でご確認いただくとして、在学中に学生の心に撒かれた愛情の教えは卒業後どのように開花したのでしょうか。設問10「先生の愛情の教えが人生でどのように生かされましたか」の回答が能弁に語っています。それぞれの境遇において、各自各様の仕方で先生の愛情の教えは育ち、多彩な花を咲かせている、と。

回答や別紙に、先生への感謝の言葉が溢れているのも故なきことである、と改めて感じ入った次第です。